

高向遺跡

一般府道河内長野かつらぎ線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1996年3月

河内長野市遺跡調査会

序 文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、高野街道に代表される和歌山や奈良へ向かう南河内の交通の要衝として発展してきた街です。

このため市内には数多くの文化財が残されています。

このような河内長野市も大阪市内への通勤圏に位置しているため住宅都市として近年、開発の波がおよせてきています。

開発がもたらす文化財や自然に対する影響も大きいものがあります。特に、埋蔵文化財は開発と直接に結び付く大きな問題です。

遺跡に託された河内長野の先人達のメッセージを現在の市民、更には未来の市民に伝えてゆかねばなりません。

本書は発掘調査の成果を収録しています。先人達のメッセージの一部でも理解するための資料として活用していただければ幸いです。

これらの発掘調査に協力していただきました施主の方々の埋蔵文化財への深いご理解に末尾ながら謝意を表するものです。

平成 8 年 3 月

河内長野市遺跡調査会
理事長 中尾謙二

例　　言

1. 本調査報告書は平成6年度に河内長野市遺跡調査会（以下調査会と略す）が大阪府から委託を受けた高向遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は河内長野市教育委員会教育部社会教育課文化財保護係主査尾谷雅彦と鳥羽正剛を担当者として実施した。
3. 調査にかかる事務は松垣孝康（前調査会事務局長）が平成6年度、濱田宗良（社会教育課課長補佐兼調査会事務局長）が平成7年度を主担した。
4. 本書の執筆は第1・2・4章を鳥羽が行い、第3章第1節を株式会社夏原技研、第2節をパリノサーヴェイ株式会社が行った。
5. 編集は尾谷と鳥羽が行い、牟田口京子がこれを補佐した。文責は鳥羽が負うものである。
6. 発掘調査及び内業整理については下記の方々の参加を得た。
池田武・嘉悦真紀子・喜多順子・久保八重子・古島亮介・小森光・重野真紀・杉本祐子・田川富子・田中良明・中尾智行・中村嘉彦・林和宏・東田幸子・福島里浦・藤井美佐子・古池陽子・桥本裕子・松尾和代・松村佳映・三井義勝
7. 航空測量は写測エンジニアリング株式会社、発掘作業は株式会社島田組が実施した。
8. 遺物及び遺構の一部の写真は中西和子が撮影した。
9. 発掘調査及び内業整理については下記の方々の協力、指導を得た。記して感謝する。
栗田薰（富田林市教育委員会）・大阪府富田林土木事務所・高向地区自治会・山中一郎（京都大学文学部教授）
(敬称略)
10. 本調査の記録はスライドフィルム等でも保管しており、広く一般の方々に活用されることを望むものである。

凡 例

1. 本調査報告書に記載されている標高はTPを基準としている。
2. 土色は新版標準土色帖による。
3. 平面測量は国土座標第VI系による5mメッシュを基準に実施したものである。
4. 図中の北は座標北である。
5. 本書の遺構名は下記の略記号を用いた。

S B…掘立柱建物	S D…溝	S K…土坑	S P…ピット
S S…竪穴系小石室	S Y…窯状遺構	P……柱穴（S Bを構成するピット）	
6. 文中の土師器、須恵器の編年は奈良国立文化財研究所の平城宮土器の編年に基づくものである。但し、一部の須恵器については陶邑編年にに基づいた。器種名については当調査会の表記による。
7. 文中の瓦器塊の型式分類は尾上実氏の和泉型瓦器塊の編年に基づくものである。
8. 遺構の実測図の縮尺は、1/30・1/60・1/80・1/200・1/300とした。
9. 遺物の実測図の縮尺は、土器1/4、瓦1/4、石器2/3、石製品1/4・1/8、鉄製品1/3、銅鏡原寸とした。
10. 須恵器、瓦器、瓦質土器、須恵質土器、陶磁器の断面は黒塗り、土師器、黑色土器、土師質土器の断面は白抜き、瓦と鉄製品の断面は斜線である。又、黑色土器の黒色部分にはスクリーントーンを付した。
11. 遺物番号と写真図版の番号は共通する。

目 次

序 文

例 言

凡 例

目 次

挿図目次

表目次

図版目次

付図目次

第1章 はじめに	1
第1節 位置と環境	1
第2節 調査に至る経過	1
第3節 遺跡の概要	4
第2章 調査の結果	7
第1節 第1調査区	7
第2節 第2調査区	20
第3節 第3調査区	27
第4節 第4調査区	42
第5節 第5調査区	45
第3章 自然科学	49
第1節 高向遺跡の考古地磁気年代推定	49
1. 考古地磁気年代推定の原理	49
2. 試料の採集と測定	50
3. 熱残留磁気測定結果	52
第2節 高向遺跡における古環境	55
1. 試料	55
2. 分析方法と結果の表示方法	56
3. 微化石の産状	57
4. 考察	60
第4章 まとめ	65

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 河内長野市遺跡分布図 (1/40000)	2
第3図 調査区位置図 (1/2500)	4
第4図 第1調査区土層断面実測図 (1/60)	7
第5図 第1調査区遺構配置模式図 (1/300)	8
第6図 S B 1 遺構実測図 (1/80)	8
第7図 S B 2 遺構実測図 (1/80)	9
第8図 S B 3 遺構実測図 (1/80)	9
第9図 S B 2・3 出土遺物実測図	9
第10図 S D 1 出土遺物実測図	10
第11図 S K 1 出土遺物実測図	10
第12図 S K 4 遺構実測図 (1/30)	10
第13図 S K 4 出土遺物実測図	11
第14図 S K 5・8・9・11・12・13出土遺物実測図	12
第15図 S P 1・2 出土遺物実測図	13
第16図 S P 9 出土遺物実測図	14
第17図 S P 13出土遺物実測図	15
第18図 S S 1 出土遺物実測図	16
第19図 S S 1 遺構実測図 (1/30)	16
第20図 S Y 1 出土遺物実測図	17
第21図 S Y 1 遺構実測図 (1/30)	17
第22図 S Y 2 出土遺物実測図	18
第23図 S Y 2 遺構実測図 (1/30)	18
第24図 第1調査区包含層出土遺物実測図	19
第25図 第2調査区土層断面実測図 (1/60)	20
第26図 第2調査区遺構配置模式図 (1/300)	21
第27図 S B 4 遺構実測図 (1/80)	21
第28図 S B 5 遺構実測図 (1/80)	21
第29図 S B 5 出土遺物実測図	22
第30図 S B 6 遺構実測図 (1/80)	22
第31図 S D 2 出土遺物実測図	22
第32図 S K 15出土遺物実測図	23

第33図	S P29・30・31・37・39・40・41出土遺物実測図	25
第34図	第2調査区包含層出土遺物実測図	26
第35図	第3調査区遺構配置模式図（1/300）	27
第36図	第3調査区土層断面実測図（1/60）	27
第37図	S B 7 遺構実測図（1/80）	28
第38図	S B 8 遺構実測図（1/80）	28
第39図	S B 9 遺構実測図（1/80）	29
第40図	S B 10 遺構実測図（1/80）	29
第41図	S B 11 遺構実測図（1/80）	30
第42図	S B 12 遺構実測図（1/80）	30
第43図	S B 13 遺構実測図（1/80）	31
第44図	S B 9・10・11・12・13出土遺物実測図	31
第45図	S D 4 遺構実測図（1/30）	32
第46図	S D 4 出土遺物実測図	32
第47図	S K17 遺構実測図（1/30）	32
第48図	S K16・17・19出土遺物実測図	33
第49図	S K23 遺構実測図（1/30）	33
第50図	S K24 出土遺物実測図	34
第51図	S K24 遺構実測図（1/30）	34
第52図	S K29 出土遺物実測図	34
第53図	S P50 出土遺物実測図	35
第54図	S P56・58・64・65出土遺物実測図	37
第55図	第3調査区包含層出土遺物実測図（1）	40
第56図	第3調査区包含層出土遺物実測図（2）	41
第57図	第4調査区遺構配置模式図（1/300）及び土層断面実測図（1/60）	42
第58図	S P81出土遺物実測図	43
第59図	第4調査区包含層出土遺物実測図（1）	43
第60図	第4調査区包含層出土遺物実測図（2）	44
第61図	第5調査区遺構配置模式図（1/300）及び土層断面実測図（1/60）	45
第62図	S S 2 出土遺物実測図	46
第63図	S S 2 遺構実測図（1/30）	46
第64図	第5調査区包含層出土遺物実測図（1）	46
第65図	第5調査区包含層出土遺物実測図（2）	47
第66図	広岡（1977）による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線	50
第67図	各遺構ごとの各試料の残留磁化方向の等面積投影図	53

第68図	全試料の残留磁化方向の等面積投影図	53
第69図	地磁気永年変化曲線と各遺構の平均磁化方向(●印)と 全遺構の平均磁化方向(×印)	54
第70図	第5調査区北壁の基本土層と分析試料採取層位	55
第71図	第5調査区北壁基本土層の植物珪酸体組成	59
第72図	珪藻化石・植物珪酸体	63
第73図	花粉化石のプレパラートの状況	64
第74図	建物配置模式図	65

表 目 次

第1表	河内長野市遺跡地名表	3
第2表	熱残留磁気測定結果	52
第3表	考古地磁気測定結果	52
第4表	考古地磁気年代推定結果	54
第5表	第3調査区遺構内及び第5調査区北壁基本土層の珪藻分析結果	57
第6表	第5調査区北壁基本土層の植物珪酸体分析結果	58

図 版 目 次

図版1	遺構 第1・2・3調査区 調査区全景(真上から)	
図版2	遺構 第1調査区 調査区全景(北から、南から)	
図版3	遺構 第1調査区 SB1(真上から、南から)	
図版4	遺構 第1調査区 SB2(北から)、SB3・SD1(北から)	
図版5	遺構 第1調査区 SK4(北から)、SK11(西から)	
図版6	遺構 第1調査区 SS1(東から)、SY1・2(南から)	
図版7	遺構 第2調査区 調査区全景(南から)	
図版8	遺構 第2調査区 SB4(南から)、SB5(南から)	
図版9	遺構 第2・3調査区 SB6(南から)、SB7(西から)	
図版10	遺構 第2・3調査区 調査区全景(真上から)	
図版11	遺構 第3調査区 SB8(真上から)、SB9(東から)	
図版12	遺構 第3調査区 SB10(南から)、SB10-P2根石検出状況(東から)、 SB11(南から)	

- 図版13 遺構 第3調査区 S B12(東から)、S B13(真上から)
- 図版14 遺構 第3調査区 S K17(北から)、S K23(西から)
- 図版15 遺構 第2・3・4調査区 S K24(東から)、調査区全景(西から)
- 図版16 遺構 第4・5調査区 調査区全景(東から)、S S 2(東から)
- 図版17 遺物 第1調査区 S B 2 (1・2・5~7)、S B 3 (3・4・8~10)、S D 1 (11)、S K 1 (12)、S K 4 (13・33)、S K 5 (37)、S K 8 (38)、S K 9 (39・40)、S K11 (41・43・44)、S K12 (45)、S K13 (42)
- 図版18 遺物 第1調査区 S K 4 (14~32・34~36)、S P 1 (47)、S P 2 (46)、S P 9 (48)、S P13 (49)、S S 1 (50)、S Y 1 (51~53)、S Y 2 (54・55)
- 図版19 遺物 第1調査区 第1調査区包含層(56~69・71~79・83~86)
- 図版20 遺物 第1・2調査区 第1調査区包含層(80~82)、S B 5 (87)、S D 2 (88)、S K15 (89・90)、S P29 (97)、S P30 (98)、S P31 (92)、S P37 (94)、S P39 (93)、S P40 (91・95)、S P41 (96)、第2調査区包含層(99~105・107~110)
- 図版21 遺物 第2・3調査区 第2調査区包含層(111~116)、S B 9 (117・121・123)、S B 10 (120)、S B 11 (119)、S B 12 (118)、S B 13 (122)、S D 4 (124)、S K17 (131・132)、S K24 (133)
- 図版22 遺物 第3調査区 S K16 (126)、S K17 (127・128)、S K19 (129・130)、S K29 (134)、S P50 (135)、S P56 (139)、S P58 (136)、S P64 (137・140・141)、S P65 (138)、第3調査区包含層(144~172)
- 図版23 遺物 第3調査区 第3調査区包含層(142・143・173~197)
- 図版24 遺物 第3・4調査区 第3調査区包含層(198~206)、S P81 (207)、第4調査区包含層(208~215・217~232)
- 図版25 遺物 第5調査区 S S 2 (233)、第5調査区包含層(234・236~239・241~245・247~258・260~271)

付 図 目 次

付図1 高向遺跡遺構全体図(1/200)

第1章 はじめに

第1節 位置と環境

高向遺跡は、河内長野市高向と上原町に広がる旧石器時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。

地理的環境としては、和泉葛城山系に水源をもつ石川の西岸の中位段丘上、標高約150mに位置する。遺跡の範囲は、東西約0.5km、南北約1.1kmである。

歴史的環境としては、北側約0.3kmに古墳時代後期の横穴式石室を有する塚穴古墳、中世の上原遺跡、同じく北側約0.2kmに平安時代から近世にかけての炭焼窯である長池窯跡群が位置している。東側約0.8kmの石川の東岸には楠木正成の出城として築城されたと伝えられる鳥帽子形城が位置している。南側には近接して中世の鎮壇具が出土した懸持寺跡、約0.1kmには中世の高向神社遺跡、平安時代の集落跡の宮の下遺跡、そして約0.2kmには石川の東岸の中位段丘上に縄文時代中期後半の集落跡で、奈良時代の和同開珎が出土した宮山遺跡、縄文時代の石器散布地である高木遺跡が位置している。



第1図 遺跡位置図

第2節 調査に至る経過

本次発掘調査は、大阪府富田林土木事務所（以下、土木事務所と略す）を事業主体とする、国道170号線とその東側を南北に走る府道河内長野かつらぎ線との間にアクセス道路を建設するための事前調査である。

土木事務所から建設計画の事前に、道路建設予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地内にあるかどうかの照会があり、文化財の取り扱いについて平成6年4月8日に河内長野市教育委員会（以下、市教育委員会と略す）と協議した。市教育委員会は道路計画地が高向遺跡の範囲内に該当することを確認し、文化財保護法第57条の3の発掘通知を提出するよう求めた。

平成6年4月15日に土木事務所から発掘通知が提出され、大阪府教育委員会（以下、府



第2図 河内長野市遺跡分布図 (1/40000)

番号	文化財名称	種類	時代	番号	文化財名称	種類	時代
1	長野神社遺跡	社寺	室町	64	權現城跡	城館	中世
2	河合寺	社寺		(65)	天神社遺跡	社寺	
3	觀心寺	社寺	平安~	(66)	葛城第15經塚	経塚	
4	大師山古墳	古墳	古墳(前期)	67	加賀田神社遺跡	社寺	中世
5	大師山古墳	古墳	古墳(後期)	68	庚申堂	社寺	
6	大師山遺跡	集落	弥生(後期)	69	石仏城跡	城館	中世
7	奥津寺	社寺		70	佐近城跡	城館	中世
8	鳥居子形八幡神社	社寺	室町	71	旗尾城跡	城館	中世
9	塚穴古墳	古墳	古墳(後期)	72	葛城第16經塚	経塚	
10	長池窯跡群	生産	平安~近世	(73)	葛城第18經塚	経塚	
11	小山田1号古墓	墳墓	奈良	(74)	葛城第19經塚	経塚	
12	小山田2号古墓	墳墓	奈良	(75)	佐尾城跡	城館	中世
13	延命寺	社寺		(76)	大武城跡	城館	中世
14	金剛寺	社寺	平安~	(77)	三国山経塚	経塚	
15	日野觀音寺遺跡	社寺	中世	(78)	光庵寺	社寺	
16	地藏寺	社寺		(79)	猿子城跡	城館	中世
(17)	岩湧寺	社寺	平安~	80	蟹井瀬神社遺跡	社寺	
18	五木古墳	古墳	古墳(後期)	(81)	川上神社遺跡	社寺	
19	高向遺跡	集落	旧石器~中世	82	千代田神社遺跡	社寺	
20	島船子形城	城館	中世~近世	83	向野城跡	城館	平安~室町
21	喜多町遺跡	集落	繩文~中世	84	古野町遺跡	散布地	中世
22	鳥船子形古墳	古墳	古墳(後期)	85	上原北遺跡	散布地	
23	木広窯跡	生産		86	大日寺遺跡	社寺	弥生~中世
24	蛭谷遺跡	散布地	繩文~中世	87	高向南遺跡	散布地	縄文
25	流谷八幡神社	社寺		88	小坂遺跡	集落	繩文~奈良
26	蟹井瀬南遺跡	散布地	中世	89	加塙遺跡	集落	古墳(後期)
27	蟹井瀬北遺跡	散布地	中世	90	尾崎遺跡	集落	古墳~中世
28	天見駅北方遺跡	散布地	中世	91	ジョウノマエ遺跡	城館	中世
29	千早平野駅南遺跡	散布地	中世	92	仁王山城跡	城館	中世
30	岩瀬美術館	寺墓	近世	93	タコラ城跡	城館	中世
31	清水遺跡	散布地	中世	94	岩立城跡	城館	中世
32	伝仲安廟古墳	古墳?		95	上原近世瓦窯	生産	近世
(33)	草村地蔵堂跡	社寺	近世	96	市町東遺跡	散布地	弥生~中世
34	施煙埋墓	墓	近世	97	上田町窯跡	生産	近世
(35)	中村阿弥陀堂跡	社寺	近世	98	尾崎北遺跡	散布地	古墳
(36)	東の村観音堂跡	社寺	近世	99	西之山町遺跡	集落	中世
(37)	西の村観音堂跡	社寺	近世	100	野間里遺跡	集落	平安
38	清木水阿弥陀堂跡	社寺	近世	101	鳴尾遺跡	散布地	中世
39	庵尻弥勒堂跡	社寺	近世	102	上田町遺跡	散布地	古墳~中世
(40)	宮ノ下内墓	墳墓	古墳	103	上原中遺跡	散布地	古墳~中世
41	宮山古墳	古墳?	古墳	104	小野塚跡	墳墓	
42	宮山遺跡	散布地	繩文~中世	(105)	葛城第17經塚	経塚	
43	西代蘿坤跡	城館	江戸	106	豪邸堂跡	社寺	中世~
44	上原町墓地	墳墓		107	野作遺跡	集落	中世
45	慈持寺跡	社寺	鍾乳	108	寺元遺跡	集落	奈良~中世
46	栗山遺跡	祭祀	中世~近世	(109)	施原遺跡	散布地	中世
47	寺ヶ池遺跡	散布地	繩文	110	法師塚古墳跡	古墳	
48	上原遺跡	散布地	中世	111	山上講山古墳跡	古墳	
49	住吉神社遺跡	社寺		112	西浦遺跡	集落	古墳~中世
50	高向神社遺跡	社寺	中世	113	地福寺跡	社寺	近世
51	青が原神社遺跡	社寺		114	宮の下遺跡	集落	平安~中世
52	勝所瀬河州出張所跡	城館	江戸	115	栄町遺跡	散布地	弥生~中世
53	双子塚古墳跡	古墳	古墳	116	鶴町遺跡	散布地	中世
54	雙子尻遺跡	散布地	繩文~中世	(117)	太井遺跡	散布地	中世
55	河合寺城	城館		118	鶴町北遺跡	集落	弥生~中世
56	三日市遺跡	集落	旧石器~近世	119	市町西遺跡	散布地	繩文~中世
57	日の谷城跡	城館	室町	120	栄町南遺跡	散布地	中世
58	高木遺跡	散布地	繩文	121	栄町東遺跡	散布地	
59	沙の山城跡	城館	中世	122	楠町東遺跡	散布地	
60	峰山城跡	城館	中世	123	沙の宮町南遺跡	散布地	奈良
61	稱荷山城跡	城館	中世	124	沙の宮町遺跡	散布地	中世
62	国見城跡	城館	中世	125	神ヶ丘近世墓	墳墓	近世
63	旗尾城跡	城館	中世	126	増福寺	寺	中世
				127	三昧城遺跡	墳墓・城館	中世~近世

() は地図範囲外

第1表 河内長野市遺跡地名表

教育委員会と略す)を経由して文化庁に進達した結果、文化庁から工事施工前に発掘調査を実施するようにとの指導があった。この指導に基づき再度、土木事務所と市教育委員会は協議を行った結果、発掘調査依頼があり調査を実施することとなった。これに伴って、市教育委員会は文化財保護法第98条の発掘調査の通知を府教育委員会を経由し文化庁宛に進達した。

調査については、市教育委員会と土木事務所が覚書を締結し、これに基づき市教育委員会の指導の下、河内長野市遺跡調査会と委託契約を締結した。契約にかかる外業調査(発掘調査)を平成6年6月23日から同年9月30日にかけて、内業調査を平成7年4月1日から平成8年3月24日にかけて実施し、すべての委託業務を完了した。



第3図 調査区位置図 (1/2500)

第3節 遺跡の概要

高向遺跡は1973年度に財団法人大阪文化財センター(1995年4月に財団法人大阪府埋蔵文化財協会と合併し、現在財団法人大阪府文化財調査研究センターとなる)が実施した主要地方道枚方・富田林・泉佐野線(大阪外環状線)内の遺跡の分布調査によって発見された遺跡である。

1986年には、分布調査の成果に基づいて、大阪外環状線の建設に先立ち、財団法人大阪府埋蔵文化財協会(1995年4月に財団法人大阪文化財センターと合併し、現在財団法人大阪府文化財調査研究センターとなる。以下、府協会と略す)が範囲確認調査を実施した結果、遺構遺物を確認した。これを受けて、府教育委員会は、大阪府土木部(以下、府土木部と略す)に建設予定地内は全面発掘調査の必要性があることを通知した。その後、府土木部と発掘調査の取り扱いについて協議をした結果、府教育委員会の指導の下、1987年か

ら1988年にかけて、府協会が3次にわけて発掘調査を行うこととなった。

調査の結果、遺跡の時期は旧石器時代から縄文時代前期、弥生時代中期、古墳時代中期、奈良時代、平安時代、鎌倉時代と続く複合遺跡であることがわかった。特に、縄文時代前期には遺構が未検出ではあるものの、出土した石器の豊富な器種構成から石器製作の場である可能性が考えられた。^(註1)

1989年には、段丘の縁辺部において市教育委員会が市立高向公民館における防火水槽設置^(註2)と、個人住宅の建設^(註3)に伴い発掘調査を実施した。その結果、奈良時代の平城宮土器II～IIIに相当する土師器を中心とした土器を伴う掘立柱建物、溝などが検出され、奈良時代の遺構が遺跡範囲の石川寄り、すなわち東部の丘陵縁辺部に集中することが判明した。

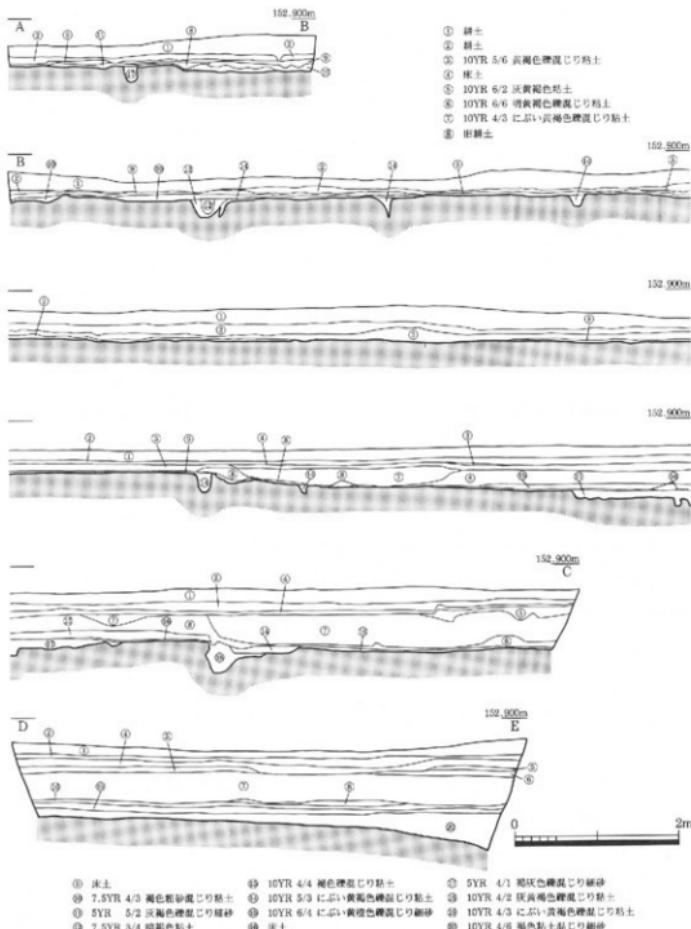
(註1) 財團法人大阪府埋蔵文化財協会 1989年3月 『高向遺跡』

(註2) 河内長野市教育委員会 1990年3月 『河内長野市埋蔵文化財調査報告書IV』

(註3) 河内長野市遺跡調査会 1992年3月 『河内長野市遺跡調査会報III』

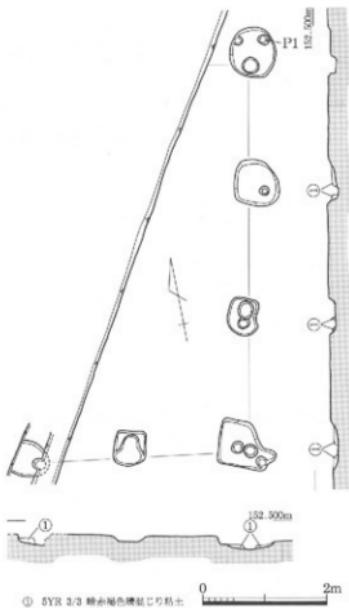
第2章 調査の結果

第1節 第1調査区



第4図 第1調査区土層断面実測図 (1/60)

遺構と遺物

第5図 第1調査区
遺構配置模式図(1/300)

第6図 SB1 遺構実測図(1/80)

(1) 建物

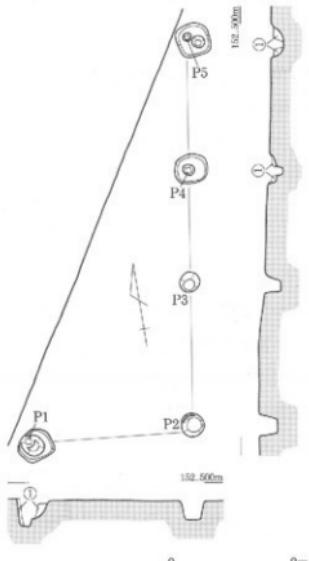
〔SB1〕 (第6図、図版3)

SB1は第1調査区の南に位置する掘立柱建物である。建物の西側は調査区外に及ぶため詳細な規模は不明である。柱穴の掘方の平面形は円形のものとやや方形を呈するものが検出された。検出した遺構の規模は、桁行3間(6.24m)×梁行2間(3.46m)以上で、柱間は桁行1.92~2.28m、梁行1.50~1.96m、柱穴の掘方の径0.48~0.76m、深さ0.05~0.15mで、柱穴の径0.16~0.52m、深さ0.08~0.30mを測る。建物の軸方向はN-12°-Eを示す。

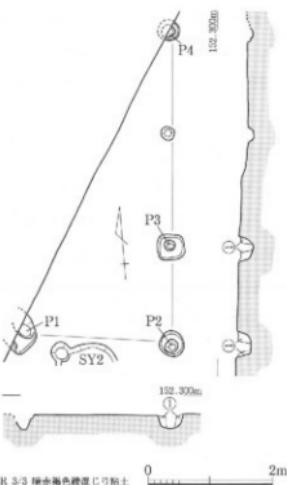
遺物はP1から土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔SB2〕 (第7・9図、図版4・17)

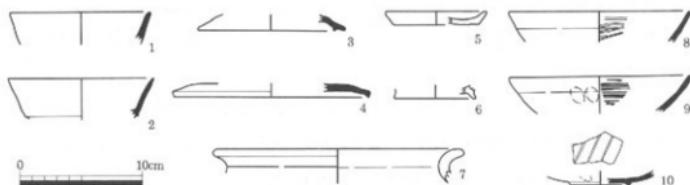
SB2は第1調査区の中央に位置する掘立柱建物である。建物の西側は調査区外に及ぶため詳細な規模は不明である。柱穴の掘方の平面形は円形のものとやや方形を呈するものが検出された。検出した遺構の規模は、桁行3間(6.28m)以上×梁行1間(2.72m)以上で、柱間は桁行1.84~2.30m、梁行2.72m、柱穴の掘方の径0.48~0.54m、深さ0.17~0.44mで、柱穴の径0.18~0.38m、深さ0.20~0.44mを測る。建物の軸方向はN-8°-Eを示す。桁行の長さや軸方向がSB1と近似しているので同規模の建物が存在した可能性がある。



第7図 SB 2遺構実測図(1/80)



第8図 SB 3遺構実測図(1/80)



第9図 SB 2・3出土遺物実測図

遺物はP1から土師器と須恵器、P2から土師器、須恵器の壺(2)、土師質土器の皿(5)、壺(6)、甕(7)、P3から須恵器の壺(1)、P4から土師器、土師質土器の甕、瓦質土器の塊、P5から土師器が出土した。(1・2・5～7)以外は細片のため図化できなかった。遺物から中世の建物の可能性がある。

〔SB 3〕(第8・9図、図版4・17)

SB 3はSB 2の北に近接して位置する掘立柱建物である。建物の北側と西側は調査区外に及ぶため詳細は不明である。柱穴の掘方の平面形は円形のものとやや方形を呈するものが検出された。検出した遺構の規模は、桁行3間(5.02m)以上×梁行1間(2.40m)以上で、柱間は桁行1.54～1.84m、梁行2.40m、柱穴の掘方の径0.40～0.44m、深さ0.08～0.24mで、柱穴の径0.08～0.24m、深さ0.08～0.24mを測る。建物の軸方向はN-6°-

Eを示す。

遺物はP1から、瓦器塊(8~10)、P2から土師器の壺、製塩土器、P3から土師器の皿、須恵器の壺蓋(4)、土師質土器、P4から須恵器の壺蓋(3)が出土した。この内、(3・4・8~10)以外は細片のため図化できなかった。(8~10)が和泉型瓦器塊III-3に相当することから、建物は13世紀前半の可能性がある。

(2) 溝

[SD1] (第10図、図版4・17)

SD1は第1調査区の北に位置する。調査区の西側から北側へと延びており、その両端は調査区外に及ぶため平面形が明らかでない。検出した遺構の規模は、長さ2.34m、北端の幅0.34m、西端の幅0.15m、北端の深さ0.12m、西端の深さ0.03mを測る。

遺物は須恵器の壺(11)が出土した。(11)が平城宮土器IIIの壺Bに相当することから、SD1は8世紀中葉のものと考えられる。



第10図 SD1出土遺物実測図

(3) 土坑

[SK1] (第11図、図版17)

SK1は第1調査区の南に位置する。平面形は楕円形で、遺構の規模は長軸0.87m、短軸0.28m、深さ0.16mを測る。



第11図 SK1出土遺物実測図

[SK2]

SK2はSK1の南東1.5mに位置する。遺構の東側は調査区外に及ぶため、全容が明らかでない。検出された遺構の規模は、長軸0.60m、短軸0.17m、深さ0.11mを測る。

遺物は土師器の壺が出土したが、細片のため図化できなかった。

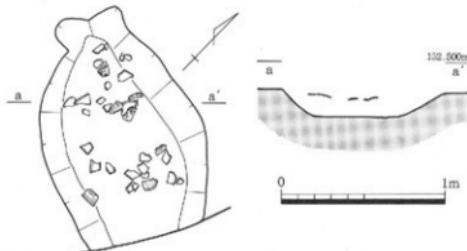
[SK3]

SK3はSK2の北1.9mに位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.55m、短軸0.51m、深さ0.24mを測る。

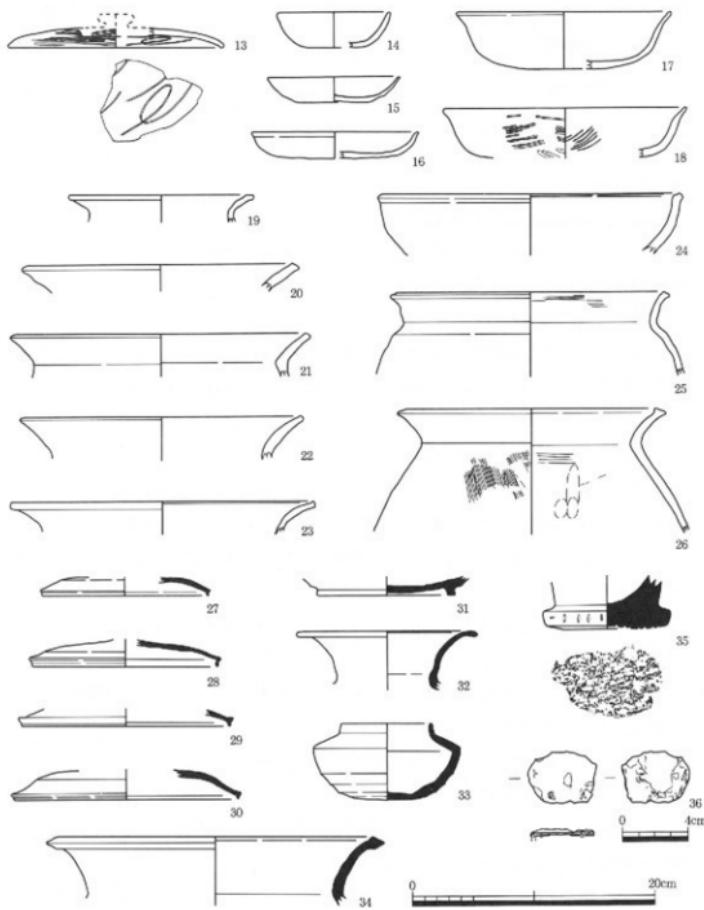
遺物は土師器、須恵器の壺、壺が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

[SK4] (第12・13図、図版5・17・18)

SK4はSK3の北東



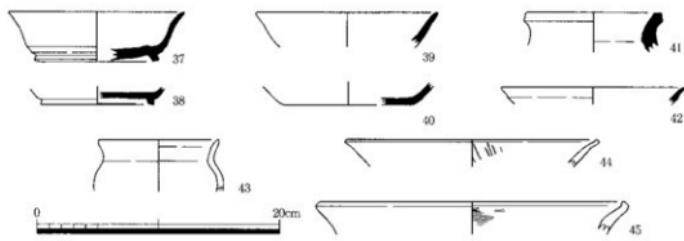
第12図 SK4遺構実測図 (1/30)



第13図 S K 4出土遺物実測図

2.2mにあり、調査区の東端に位置する。遺構の東側は調査区外に及ぶため全容は不明である。遺構内から一括に投棄されたと考えられる多量の土師器と須恵器が出土した。検出された遺構の規模は長軸1.42m、短軸0.99m、東側の深さ0.15m、西側の深さ0.13mを測る。

遺物は土師器の壺蓋(13)、壺(15・17・18)、塹(14)、皿(16)、鉢(24)、壺(19~23・25・26)、須恵器の壺蓋(27~30)、壺(31)、鉢(35)、短頸壺(33)、壺(32・34)、用途不明の鉄製品(36)が出土した。これらの遺物から平城宮土器V~VIを下限時期とする8世紀後半の



第14図 SK 5・8・9・11・12・13出土遺物実測図

遺構と考えられる。

〔SK 5〕（第14図、図版17）

SK 5はSK 4の北に近接して位置する。遺構の東側は調査区外に及ぶため全容が不明である。検出された遺構の規模は長軸0.96m、短軸0.52m、深さ0.18mを測る。

遺物は須恵器の壺(37)が出土した。(37)が平城宮土器IIIの壺B I-1に相当することから、8世紀中葉の遺構と考えられる。

〔SK 6〕

SK 6はSK 5の北西1mに位置し、北側がSP 8に切られている。遺構の平面形は検出状況から方形を呈するものと見られる。遺構の規模は長軸0.62m、短軸0.44m、深さ0.06mを測る。

遺物は土師器、須恵器が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

〔SK 7〕

SK 7はSK 6の北東1.4mに位置する。遺構の平面形は円形を呈する。遺構の規模は径0.62m、深さ0.27mを測る。

遺物は須恵器の甕が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔SK 8〕（第14図、図版17）

SK 8はSK 7の北1.4mに位置する。遺構の平面形は不整形な方形を呈する。遺構の規模は長軸0.64m、短軸0.56m、深さ0.12mを測る。

遺物は須恵器の壺(38)が出土した。(38)が平城宮土器IVの壺B I-1に相当することから、8世紀後半の遺構と考えられる。

〔SK 9〕（第14図、図版17）

SK 9はSK 8の北東1.8mに位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸1.00m、短軸0.59m、深さ0.14mを測る。

遺物は須恵器の壺(39・40)が出土した。(39・40)が平城宮土器III～IVの壺A I-2に相当することから、8世紀中葉から後半の遺構と考えられる。

〔SK 10〕

SK 10はSK 9の東に近接して位置する。遺構は東側が調査区外に位置するため全容が

不明である。検出された遺構の規模は長軸1.03m、短軸0.32m、深さ0.11mを測る。

遺物は須恵器の壺、壺が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

〔S K11〕（第14図、図版5・17）

S K11はS K10の西2mに位置する。遺構は西側が調査区外に及ぶため全容が不明である。検出された遺構の規模は長軸1.80m、短軸1.08m、深さ0.15mを測る。

遺物は土師器の壺(44)、壺(43)、須恵器の壺(41)、製塙土器が出土した。製塙土器は細片のため図化できなかった。

〔S K12〕（第14図、図版17）

S K12はS K11の北東2.3mに位置する。遺構の平面形は長椭円形である。遺構の規模は長径0.93m、短径0.59m、深さ0.80mを測る。

遺物は土師器の壺(45)、須恵器の壺身、壺、土師質土器の土釜、瓦器が出土した。(45)以外は細片のため図化できなかった。

〔S K13〕（第14・23図、図版17）

S K13はS K12の北2mに位置し、SY2によって切られている。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.69m、短軸0.36m、深さ0.18mを測る。

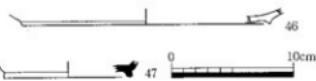
遺物は瓦器の塊(42)、土師質土器が出土したが、土師質土器は細片のため図化できなかった。

（4）ピット

〔S P 1〕（第15図、図版18）

S P 1はS B 1の東に近接して位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.36m、短軸0.33m、深さ0.12mを測る。

遺物は須恵器の壺(47)、土師質土器の甕が出土した。土師質土器は細片のため図化できなかった。



第15図 S P 1・2出土遺物実測図

〔S P 2〕（第15図、図版18）

S P 2はS P 1の北に近接して位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.22m、深さ0.12mを測る。

遺物は土師器の甕(46)、土師質土器が出土した。土師質土器は細片のため図化できなかった。

〔S P 3〕

S P 3はS P 2の南東1.7mに位置する。遺構の平面形は不整形な円形である。遺構の規模は径0.15m、深さ0.08mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P 4〕

S P 4 は S P 3 の北東に近接して位置する。遺構の平面形は遺構の東側が調査区外に及ぶため不明である。検出した遺構の規模は長軸0.38m、短軸0.36m、深さ0.17mを測る。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P 5]

S P 5 は S P 4 の北に近接して位置する。遺構の平面形は椭円形である。遺構の規模は長径0.20m、短径0.18m、深さ0.14mを測る。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P 6]

S P 6 は S P 5 の東に近接して位置する。遺構は東側が調査区外に及ぶため全容が不明である。検出された遺構の規模は長軸0.25m、短軸0.17m、深さ0.13mを測る。

遺物は須恵器、土師質土器が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

[S P 7]

S P 7 は S P 6 の北西2.5mに位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.24m、深さ0.06mを測る。

遺物は土師器の壺、甕、須恵器の壺、土師質土器の土釜が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

[S P 8]

S P 8 は S P 7 の北東2.1mに位置し、S K 6 の北側を切っている。遺構の平面形は椭円形である。遺構の規模は長径0.26m、短径0.22m、深さ0.14mを測る。

遺物は須恵器の甕が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P 9] (第16図、図版18)

S P 9 は S P 8 の北東1.1mに位置し、東側が S K 7 に切られている。遺構の平面形は検出状況から不整形な円形と思われる。

検出した遺構の規模は径0.18m、深さ0.14mを測る。

遺物は須恵器の壺(48)が出土した。



第16図 S P 9 出土遺物実測図

[S P 10]

S P 10 は S P 9 の東に近接して位置する。遺構の平面形は椭円形を呈している。遺構の規模は長径0.28m、短径0.25m、深さ0.24mを測る。

遺物は須恵器の甕が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P 11]

S P 11 は S P 10 の北西2.2mに位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.18m、深さ0.17mを測る。

遺物は土師器の壺、須恵器の壺、土師質土器、製塙土器が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

[S P 12]

S P12はS P11の北1.2mに位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.23m、短軸0.17m、深さ0.16mを測る。

遺物は須恵器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P13〕（第17図、図版18）

S P13はS P12の北東1.9mに位置する。遺構の平面形は北側が他の遺構に切られているために全容が明らかでないが、検出状況から不整形な梢円形とみられる。検出した遺構の規模は長径0.32m、短径0.27m、深さ0.10mを測る。

遺物は瓦器塊(49)が出土した。



第17図 S P13出土遺物実測図

〔S P14〕

S P14はS P13の北に近接して位置する。遺構の平面形は不整形な円形である。検出した遺構の規模は径0.18m、深さ0.01mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P15〕

S P15はS P14の北西に位置しS K11の東側を切っている。遺構の平面形は円形である。遺構の規模は径0.39m、深さ0.05mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P16〕

S P16はS P15の北東2.1mに位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.29m、短軸0.22m、深さ0.19mを測る。

遺物は須恵器の杯蓋、土師質土器の土釜が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

〔S P17〕

S P17はS P16の北西に近接して位置する。遺構の平面形は梢円形である。遺構の規模は長径0.25m、短径0.23m、深さ0.20mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P18〕

S P18はS P17の東1mに位置する。遺構の平面形は不整形な円形である。遺構の規模は径0.25m、深さ0.20mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P19〕

S P19はS P18の北西に近接して位置する。遺構の平面形は梢円形である。遺構の規模は長径0.30m、短径0.24m、深さ0.19mを測る。

遺物は土師器の甕が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P20〕

S P20はS P19の北西に近接して位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.17m、深さ0.12mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P21]

S P21はS P20の西に近接して位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.22m、深さ0.12mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P22]

S P22はS P21の北西に近接して位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.32m、短軸0.27m、深さ0.17mを測る。

遺物は土師器、須恵器、土師質土器、瓦器が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

[S P23]

S P23はS P22の北東3mに位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.18m、深さ0.20mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P24] (第23図)

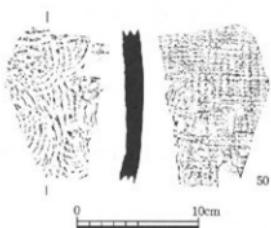
S P24はS P23の北西2.1mにあり、S Y2の北側を切って位置している。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.30m、深さ0.19mを測る。

遺物は土師器、須恵器の壺が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

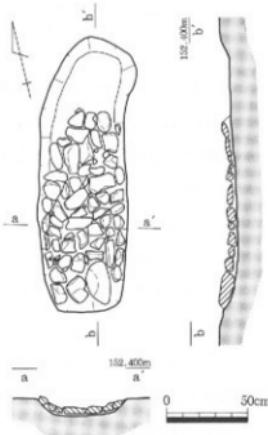
(5) 壊穴系小石室

[S S1] (第18・19図、図版6・18)

S S1はS B2の南に近接して位置する。遺構は歪な方形の掘方を持ち、内部には扁平な川原石を用いて敷き詰め礎床を形成している。石の検出状況は底部の水準が均等になるように敷き詰め、側部をやや立ち上げており、



第18図 S S1 出土遺物実測図



第19図 S S1 遺構実測図 (1/30)

当初は北側の石敷のない部分にも同様に石が敷かれていたことが考えられる。また側部の2箇所から須恵器の甕の体部が床に転用されたものが検出された(第19図▲印)。このような検出状況からSS1は竪穴系小石室と考えられる。遺構の規模は長軸1.76m、短軸0.60m、深さ0.12m、使用された石は最大のもので36cm×23cm×8cmを測る。軸方向はN-13°-Eを示す。

遺物は床に転用された須恵器の甕(50)、埋土から土師器、須恵器、土師質土器の土釜が出土した。(50)以外は細片のため図化できなかった。

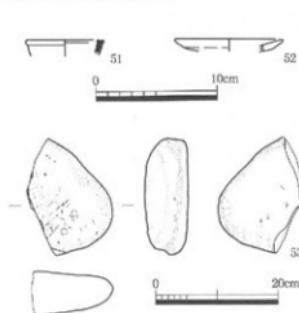
(6) 窯状遺構

[SY1] (第20・21図、図版6・18)

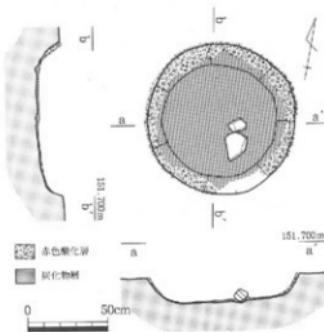
SY1はSB3の南1.2mに位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.94m、深さ0.17mを測る。遺構内は周囲の壁に最高0.03mの酸化層が形成されており、底部には酸化層ではなく最高0.02mの炭化層が堆積していた。遺構は酸化層の検出状況から当初天井部をもち、不完全な密封がなされたか、もしくは低温長時間の焼成が行われた可能性がある。底部には平坦面をもっており、窯として機能した可能性がある。遺構の埋土は多量の炭化物を包含していた。

遺物は土師器、須恵器のミニチュア土器(51)、土師質土器の皿(52)、土釜、瓦器の塊、叩石(53)と見られるものが出土した。(51~53)以外は細片のため図化できなかった。遺構の時期については埋土に瓦器がみられることから、鎌倉時代を下限時期とするものと考えられる。

また、後述の第3章第1節の熱残留磁気測定法による自然科学的調査の結果からは、12世紀中頃と推定される。



第20図 SY1出土遺物実測図



第21図 SY1遺構実測図 (1/30)

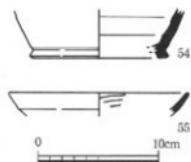
[SY2] (第22・23図、図版6・18)

SY2はSY1の北に近接して位置する。遺構の平面形は周囲のピットなどに切られて

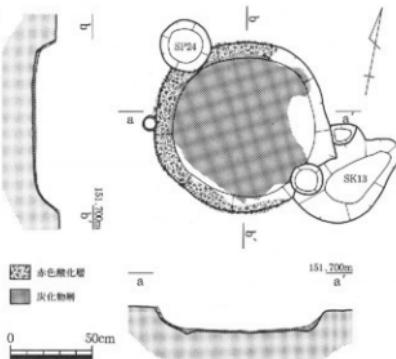
いるが円形を呈するとわかる。遺構の規模は径1.07m、深さ0.15mを測る。遺構内は周囲の壁に最高0.03mの酸化層が形成されており、底部には酸化層ではなく最高0.02mの炭化層が堆積していた。遺構は酸化層の検出状況からSY1と同様、当初天井部をもち不完全な密閉がなされたか、もしくは低温で長時間の焼成が行われた可能性がある。底部には平坦面をもっており、窯として機能した可能性がある。SY1と酷似する規模や酸化層の形成状態から同じ目的のために構築されたと考えられる。遺構の埋土にはSY1と同じく、多量の炭化物を包含していた。

遺物は須恵器の壺(54)、瓦器の塊(55)が出土した。(55)が尾上編年III-3に相当することから、13世紀前半を下限時期とする遺構と考えられる。

また、後述の第3章第1節の熱残留磁気測定法による調査の結果からは、12世紀中頃と推定される。



第22図 SY2出土遺物実測図

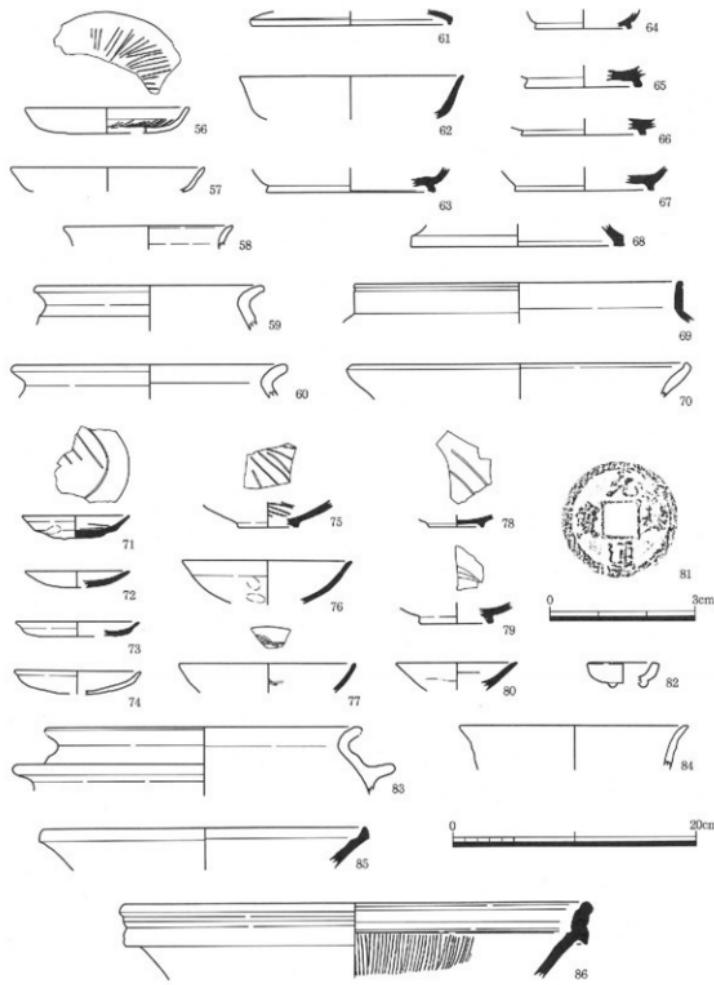


第23図 SY2 遺構実測図 (1/30)

(7) 包含層 (第24図、図版19・20)

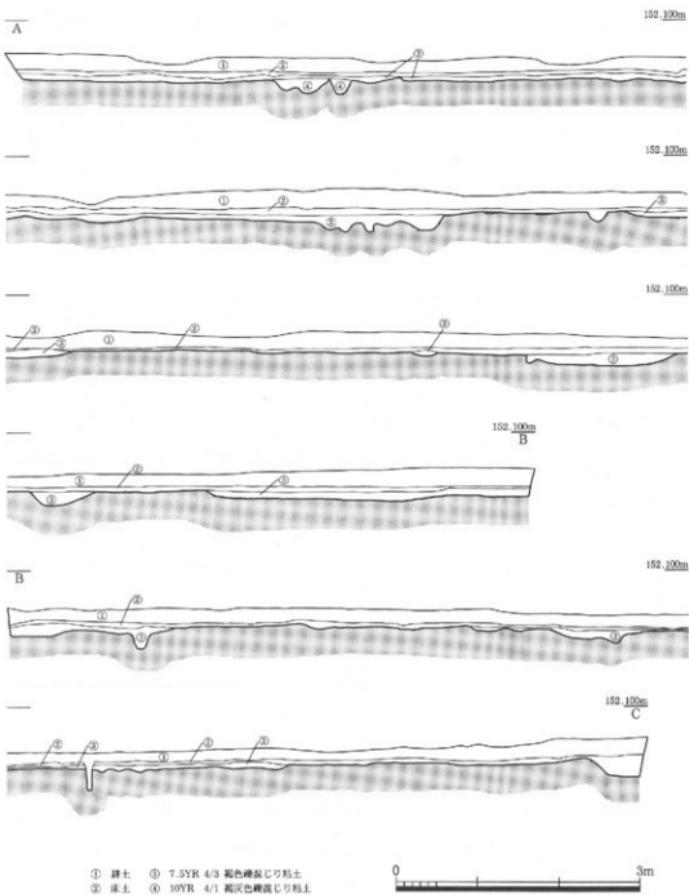
包含層からの遺物は土師器、須恵器、瓦器、土師質土器、須恵質土器、白磁、陶器、銅錢が出土した。

図化できた遺物には土師器の皿(56・57)、甕(58~60・70)、製塙土器(84)、須恵器の蓋(61)、壺(62~67)、壺(68・69)、瓦器の皿(71~73)、塊(75~79)、土師質土器の皿(74)、土釜(83)、ミニチュア土器(82)、須恵質土器の束縛系の練鉢(85)、白磁の碗(80)、堺播鉢(86)、銅錢の元祐通宝(81)があった。



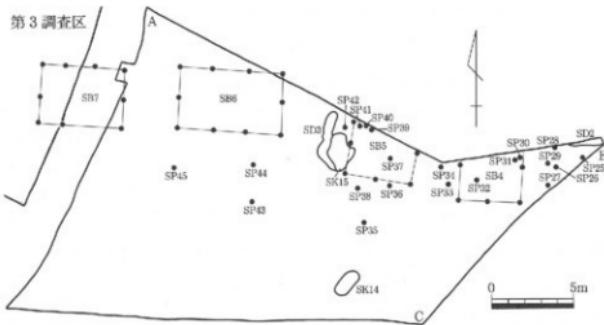
第24図 第1調査区包含層出土遺物実測図

第2節 第2調査区



第25図 第2調査区土層断面実測図 (1/60)

遺構と遺物



第26図 第2調査区遺構配置模式図 (1/300)

(1) 建物

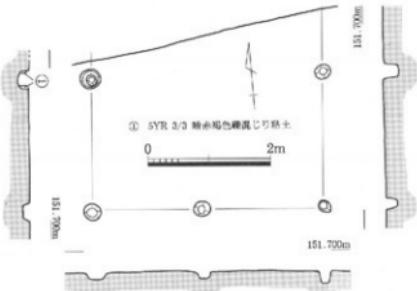
〔S B 4〕 (第27図、図版8)

S B 4は第2調査区の東に位置する掘立柱建物である。遺構の全容は建物の北側が調査区外に及ぶため不明である。柱穴の掘方の平面形はほぼ円形である。検出した建物の規模は、桁行1間(2.28m)以上×梁行2間(3.76m)で、柱間は桁行2.16~2.40m、梁行1.78~1.98m、柱穴の掘方の径0.18~0.34m、深さ0.10~0.21mで、柱穴の径0.20m、深さ0.18mを測る。建物の軸方向はN-3°-Eを示す。

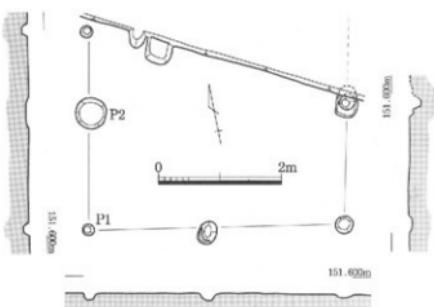
出土した遺物はなかった。

〔S B 5〕 (第28・29図、図版8・20)

S B 5はS B 4の西2.5mに位置する掘立柱建物である。遺構の全容は建物の北側が調査区外に及ぶため不明である。柱穴の掘方の平面形はほぼ円形であ



第27図 S B 4 遺構実測図 (1/80)



第28図 S B 5 遺構実測図 (1/80)

る。検出した建物の規模は、桁行2間(3.26m)以上×梁行2間(4.12m)で、柱間は桁行1.90~2.00m、梁行1.92~2.20m、柱穴の掘方の径0.16~0.48m、深さ0.04~0.21mで、柱穴の径0.22m、深さ0.19mを測る。建物の軸方向はN-10°-Eを示す。

遺物はP1から土師質土器の皿(87)、P2から土師器の皿、甕が出土した。(87)以外のものは細片のため図化できなかった。遺物から中世の建物の可能性がある。

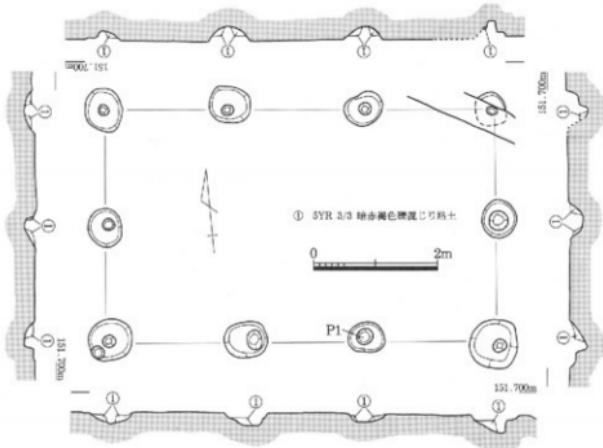
〔S B 6〕（第30図、図版9）

S B 6はS B 5の西3.8mに位置する掘立柱建物である。柱穴の掘方の平面形はほぼ円形であるが、やや方形のものも見られる。検出した建物の規模は、桁行3間(6.28m)×梁行2間(3.84m)である。柱間は桁行1.78~2.36m、梁行1.76~2.08m、柱穴の掘方の径0.12~0.32m、深さ0.11~0.30mで、柱穴の径0.16~0.30m、深さ0.12~0.32mを測る。建物の軸方向はN-86°-Wを示す。建物の面積は24.12m²である。

遺物はP1から土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。



第29図 S B 5
出土遺物実測図



第30図 S B 6 遺構実測図 (1/80)

(2) 溝

〔S D 2〕（第31図、図版20）

S D 2は調査区の東端に位置する。遺構のはとんどが調査区外に及ぶため全容が明らかでない。検出した規模は長さ2.21m、幅0.40m、東端の深さ0.04m、西端の深さ0.06mを測る。

遺物は土師器、須恵器、土師質土器の皿(88)、黒色土器A類が出土した。(88)以外は細片のため図化できなかった。



第31図 S D 2
出土遺物実測図

[S D 3]

S D 3はS B 5の西1.2mに位置する。遺構の平面形は東側がS K15に切られているが、不整形であることがわかる。検出した遺構の規模は長さ4.04m、幅0.62m、北側の深さ0.03m、中央の深さ0.05m、西側の深さ0.03mを測る。

遺物は土師器、須恵器の甕、土師質土器の皿が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

(3) 土坑

[S K14]

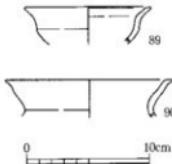
S B 5の南6mに位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸1.82m、短軸0.88m、深さ0.08mを測る。

遺物は土師器、須恵器が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

[S K15] (第32図、図版20)

S K15はS D 3の東側を切って位置している。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸2.35m、短軸1.70m、深さ0.18mを測る。

遺物は土師器の皿、鉢(89)、甕(90)、須恵器の壺、甕、土師質土器、瓦器、製塙土器が出土した。(89・90)以外は細片のため図化できなかった。



第32図 S K15出土遺物実測図

(4) ピット

[S P25]

S P25はS D 2の南に近接して位置する。遺構の平面形は円形を呈する。遺構の規模は径0.23m、深さ0.19mを測る。

遺物は土師器の壺が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P26]

S P26はS P25の南西1.5mに位置する。遺構の平面形は梢円形である。遺構の規模は長径3.40m、短径2.60m、深さ0.20mを測る。

遺物は土師器、須恵器、土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P27]

S P27はS P26の南西に近接して位置する。遺構の平面形は梢円形である。遺構の規模は長径0.27m、短径0.24m、深さ0.13mを測る。

遺物は土師器の甕が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P28]

S P28はS P27の北2.1mに位置する。遺構の北側は側溝で切られているが、平面形は

楕円形と考えられる。遺構の規模は長径0.22m、短径0.20m、深さ0.22mを測る。

遺物は土師器と黒色土器A類が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

〔S P 29〕（第33図、図版20）

S P 29はS P 28の南西に近接して位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.32m、短軸0.29m、深さ0.23mを測る。

遺物は土師器の甕、黒色土器A類の壺(97)が出土した。土師器は細片のため図化できなかった。

〔S P 30〕（第33図、図版20）

S P 30はS P 29の北西1.4mに位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.19m、深さ0.20mを測る。

遺物は黒色土器A類の壺(98)が出土した。

〔S P 31〕（第33図、図版20）

S P 31はS P 30の北西に近接して位置する。遺構の平面形は楕円形である。遺構の規模は長径0.29m、短径0.26m、深さ0.19mを測る。

遺物は土師器の甕(92)、土師質土器が出土した。土師質土器は細片のため図化できなかった。

〔S P 32〕

S P 32はS P 31の南西2.3mに位置する。遺構の平面形は楕円形である。遺構の規模は長径0.24m、短径0.22m、深さ0.14mを測る。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P 33〕

S P 33はS P 32の南西1.5mに位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.26m、深さ0.12mを測る。

遺物は土師質土器の皿が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P 34〕

S P 34はS P 33の北西に近接して位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.34m、深さ0.18mを測る。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

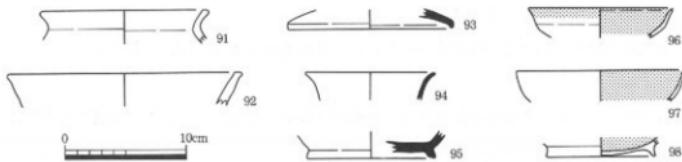
〔S P 35〕

S P 35はS B 5の南2.5mに位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.15m、深さ0.04mを測る。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P 36〕

S P 36はS P 35の北東2.6mに位置する。遺構の平面形はやや歪な楕円形である。遺構の規模は長径0.29m、短径0.25m、深さ0.06mを測る。



第33図 S P 29・30・31・37・39・40・41出土遺物実測図

遺物は土師器、須恵器が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P 37] (第33図、図版20)

S P 37はS P 36の北1.4mに位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.27m、深さ0.16mを測る。

遺物は須恵器の壺(94)が出土した。

[S P 38]

S P 38はS P 37の南西2.5mに位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.25m、深さ0.09mを測る。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P 39] (第33図、図版20)

S P 39はS P 38の北3.5mに位置する。遺構の平面形は北側が側溝に切られているが、不整形であるとわかる。検出した遺構の規模は長軸0.44m、短軸0.38m、深さ0.03mを測る。

遺物は土師器、須恵器の壺(93)が出土した。土師器は細片のため図化できなかった。

[S P 40] (第33図、図版20)

S P 40はS P 39の西に近接して位置する。遺構の平面形は北側が側溝に切られているが、不整形と考えられる。検出した遺構の規模は長軸0.30m、短軸0.29m、深さ0.50mを測る。

遺物は土師器の壺(91)、須恵器の壺(95)が出土した。

[S P 41] (第33図、図版20)

S P 41はS P 40の西に近接して位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.40m、短軸0.34m、深さ0.17mを測る。

遺物は土師器の壺、黒色土器A類の壺(96)が出土したが、土師器は細片のため図化できなかった。

[S P 42]

S P 42はS P 41の西に近接して位置する。遺構の平面形は楕円形である。遺構の規模は長径0.30m、短径0.28m、深さ0.20mを測る。

遺物は須恵器が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P 43]

S P 43はS B 6の南2.9mに位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模

は径0.20m、深さ0.09mを測る。

遺物は土師器、須恵器の壺が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

〔S P44〕

S P44はS P43の北2mに位置する。遺構の平面形は歪な円形である。遺構の規模は径0.28m、深さ0.08mを測る。

遺物は土師器、須恵器の甕、瓦器の壺が出土したが、いずれも細片のため図化できなかつた。

〔S P45〕

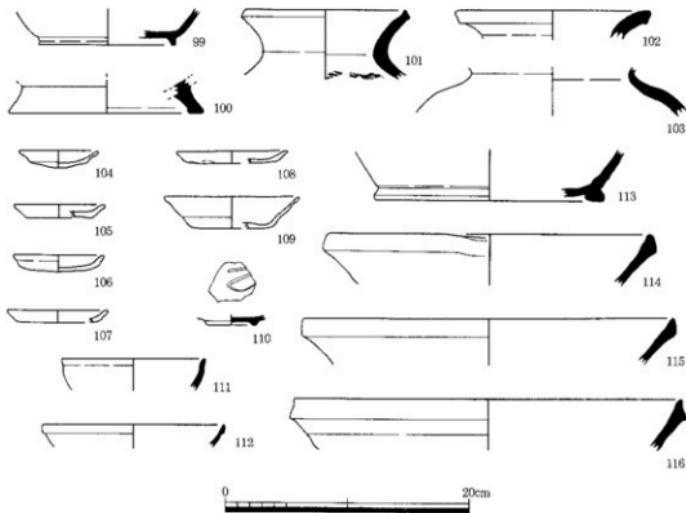
S P45はS P44の西4.6mに位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.24m、短軸0.22m、深さ0.14mを測る。

遺物は出土しなかつた。

(5) 包含層（第34図、図版20・21）

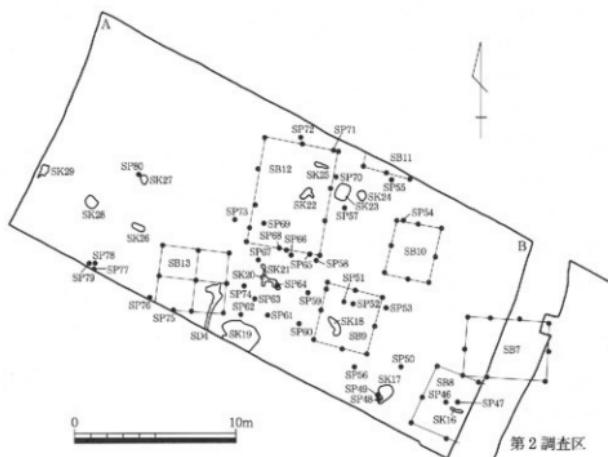
包含層からの遺物は須恵器、土師質土器、瓦器、須恵質土器、白磁、陶器が出土した。

図化できた遺物には須恵器の壺身(99)、台付壺(100)、甕(101～103)、土師質土器の皿(104～109)、瓦器の壺(110)、須恵質土器の東播系の練鉢(114～116)、白磁の碗(112)、瀬戸の天目茶碗(111)、瀬戸美濃系の壺(113)があった。

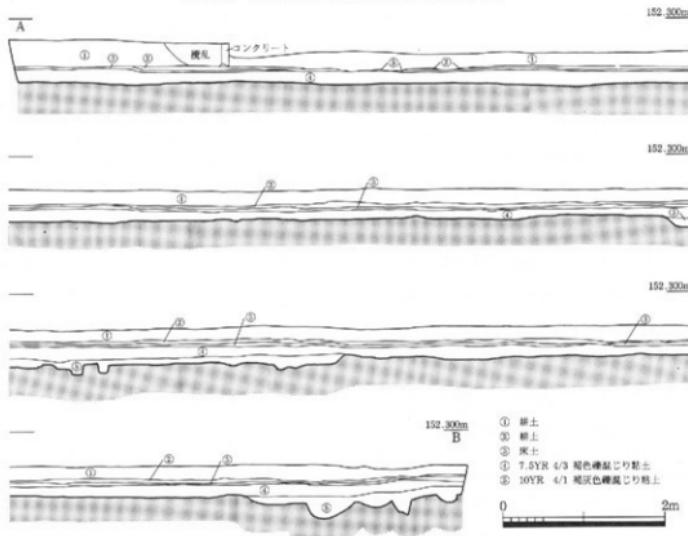


第34図 第2調査区包含層出土遺物実測図

第3節 第3調査区



第35図 第3調査区遺構配置模式図 (1/300)



第36図 第3調査区土層断面実測図 (1/60)

遺構と遺物

(1) 堀立柱建物

[S B 7] (第37図、図版9)

S B 7は第2調査区と第3調査区にまたがって位置する堀立柱建物であるが、便宜上第3調査区に含めて報告する。柱穴の掘方の平面形はほぼ円形のものである。検出した建物の規模は、桁行3間
 $(5.16m) \times$ 梁行2間
 $(3.62m)$ で、柱間は
 桁行1.45~1.80m、
 梁行1.64~2.00m、
 柱穴の掘方の径0.40
 ~0.68m、深さ0.12
 ~0.29mで、柱穴の
 径0.14~0.24m、深
 さ0.12~0.30mを測
 る。建物の軸方向は
 $N - 86^\circ - W$ を示す。
 建物の面積は18.68
 m^2 である。

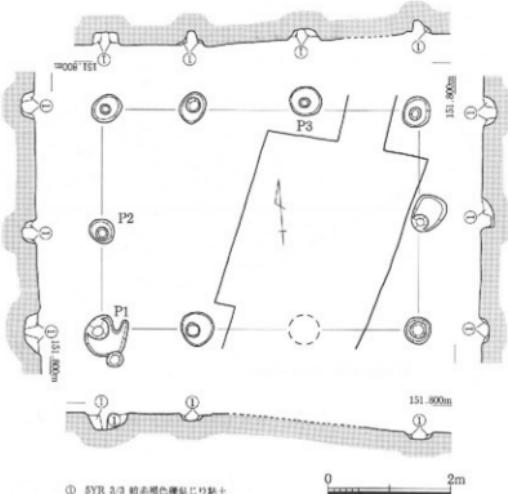
遺物はP 2から土
 師器が出土したが、

細片のため図化できなかった。

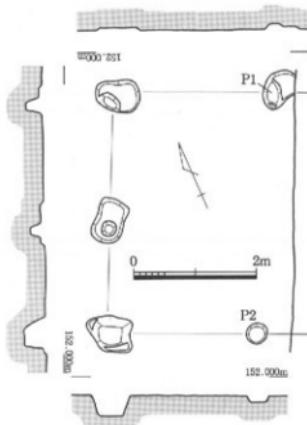
[S B 8] (第38図、図版11)

S B 8はS B 7の南に近接して位置する堀立柱建物である。柱穴の掘方の平面形は不整形である。検出した建物の規模は、桁行1間
 $(2.64m)$ 以上×梁行2間
 $(3.84m)$ である。柱間は桁行2.40~2.64m、梁行1.76~2.16m、
 柱穴の掘方の径0.56~0.68m、深さ0.09~
 0.34mで、柱穴の径0.24~0.28m、深さ0.08
 ~0.36mを測る。建物の軸方向は $N - 65^\circ - W$ を示す。

遺物はP 1とP 2から土師器、須恵器がそれぞれ出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。



第37図 S B 7 遺構実測図 (1/80)



第38図 S B 8 遺構実測図 (1/80)

〔S B 9〕 (第39・44図、図版11・21)

S B 9はS B 8の北西3.6mに位置する掘立柱建物である。柱穴の掘方の平面形はやや方形に近いものが多い。検出した建物の規模は、桁行2間(3.69m)×梁行2間(3.40m)で、柱間は桁行1.78~1.90m、梁行1.54~1.80m、柱穴の掘方の径0.48~0.76m、深さ0.28~0.39m、柱穴の径0.22~0.30m、深さ0.30~0.38mを測る。建物の軸方向はN-13°-Eを示す。建物の面積は18.6

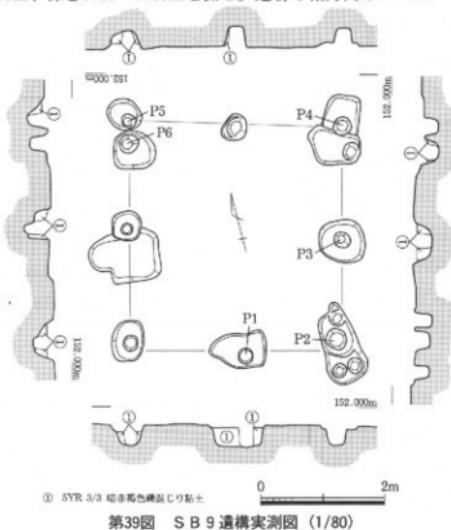
8m²である。

遺物はP 1から須恵器の坏蓋(117)、坏(121)、土師器の壺(123)が出土した。

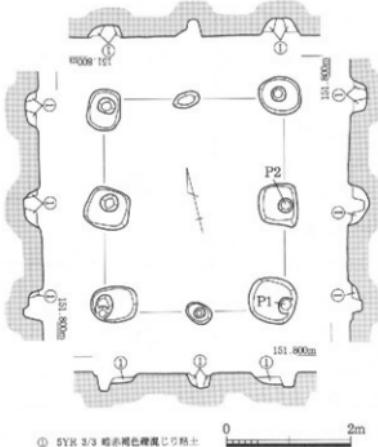
〔S B 10〕 (第40・44図、図版12・21)

S B 10はS B 9の北に近接して位置する掘立柱建物である。柱穴の掘方の平面形は方形に近いものが多い。検出した建物の規模は、桁行2間(3.36m)×梁行2間(2.86m)で、柱間は桁行1.52~1.80m、梁行1.36~1.50m、柱穴の掘方の径0.42~0.76m、深さ0.14~0.32mで、柱穴の径0.18~0.30m、深さ0.20~0.28mを測る。建物の軸方向はN-11°-Eを示す。建物の面積は9.61m²である。

遺物はP 1から須恵器の坏(120)が出土した。またP 2の柱穴で根石を検出した。(120)は平城宮土器IIIの坏B I-1に相当することから、建物は8世紀中葉のものと考えられる。



第39図 S B 9 遺構実測図 (1/80)



第40図 S B 10 遺構実測図 (1/80)

〔S B11〕（第41・44図、図版12・21）

S B11はS B10の北2mに位置する掘立柱建物である。建物の北側のほとんどが調査区外に及び全容が明らかでない。柱穴の掘方の平面形は方形に近いものが多い。検出した建物の規模は、梁行2間(2.90m)で、柱間は梁行1.40~1.48m、柱穴の掘方の径0.68~0.70m、深さ0.22~0.31mで、柱穴の径0.26m、深さ0.22~0.26mを測る。建物の軸方向はN-75°-Wを示す。

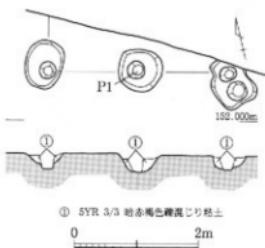
遺物はP1から土師器、須恵器の坏蓋(119)、製塙土器が出土した。

(119)が平城宮土器Ⅲの坏B I-1に相当することから、8世紀中葉の建物と考えられる。

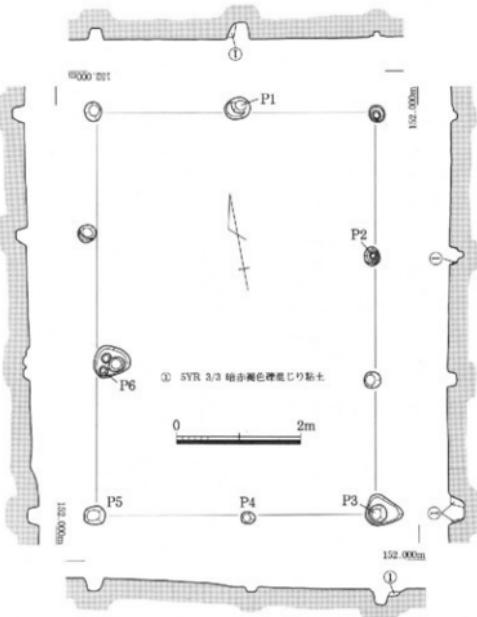
(119)以外は細片のため図化できなかった。

〔S B12〕（第42・44図、図版13・21）

S B12はS B11の西1.3mに位置する掘立柱建物である。柱穴の掘方の平面形は円形のものでほとんど占められる。検出した建物の規模は、桁行3間(6.62m)×梁行2間(4.53m)で、柱間は桁行2.00~2.36m、梁行2.08~2.30m、柱穴の掘方の径0.26~0.60m、深さ0.08~0.26mで、柱穴の径0.12~0.30m、深さ0.10~0.28mを測る。建物の軸方向はN-10°-Eを示す。建物の面積は29.99m²であ



第41図 S B11遺構実測図 (1/80)



第42図 S B12遺構実測図 (1/80)

る。

遺物は P 1 から須恵器、瓦器、土師質土器の土釜、P 2 から須恵器の甕、土師質土器、黒色土器 A 類、P 3 から須恵器の壺蓋(118)、瓦器、P 4 から土師質土器、黒色土器 A 類、P 5 から土師器の甕、P 6 から須恵器の甕、壺、土師質土器、瓦器が出土した。瓦器が出土したことから中世の建物と考えられる。(118)以外は細片のため図化できなかった。

〔S B 13〕 (第43・44図、図版13・21)

S B 13は S B 12の南西に近接して位置する掘立柱建物である。柱穴の掘方の平面形は円形のものでほとんど占められる。検出した建物の規模は、南側が一部調査区外に及ぶが、桁行 2間(4.16m)×梁行 2間(3.78m)と見られ、柱間は桁行1.90~2.26m、梁行1.85~1.90m、柱穴の掘方の

径0.28~0.36m、深さ

0.11~0.54m、柱穴の

径0.18~0.30mを測る。

建物の軸方向は N -

84° - W 示す。建物の

面積は15.72m²である。

遺物は P 1 から土師

器、P 2 から須恵器の

甕、P 3 から土師器、

P 4 から焼土塊、P 5

から土師器、P 6 から

土師器の皿(122)、壺

が出土した。土師器と

須恵器が出土したこと、

他の奈良時代の建物の

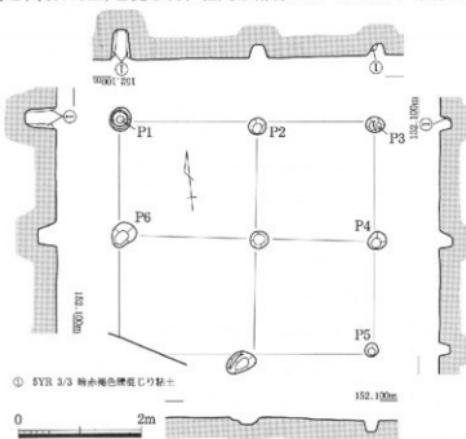
規模と類似することか

ら奈良時代の建物と考

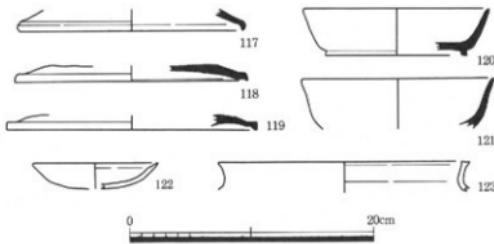
えられる。(122)以外

は細片のため図化でき

なかった。



第43図 S B 13遺構実測図 (1/80)



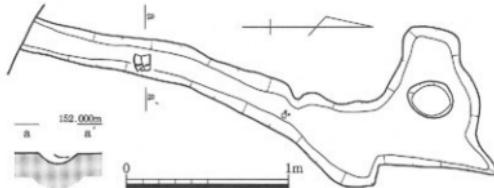
第44図 S B 9・10・11・12・13出土遺物実測図

(2) 溝

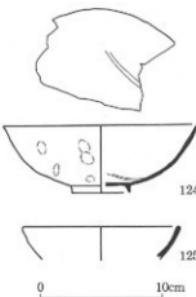
〔S D 4〕 (第45・46図、図版21)

S D 4はS B 13の南と重複して位置するが前後関係は明らかでなく、南端が調査区外に及ぶため全容が不明である。遺構の平面形は不整形である。検出した遺構の規模は長さ3.02m、北側の幅0.88m、南側の幅0.22m、北側の深さ0.13m、南側の深さ0.05mを測る。

遺物は土師質土器の壺、土釜、瓦器の壺(124・125)が出土した。(124・125)以外は細片のため図化できなかった。



第45図 S D 4 遺構実測図 (1/30)



第46図 S D 4 出土遺物実測図

(3) 土坑

〔S K16〕 (第48図、図版22)

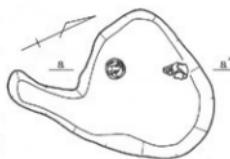
S K16は第3調査区の南端に位置する。遺構の平面形はやや歪な長椭円形である。遺構の規模は長軸0.80m、短軸0.14m、深さ0.05mを測る。

遺物は土師質土器の皿(126)が出土した。

〔S K17〕 (第47・48図、図版14・21・22)

S K17はS K16の北西3.6mに位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸1.30m、短軸0.92m、深さ0.10mを測る。

遺物は須恵器の短頸壺(132)、
土師質土器の皿(127)、壺(128)、
瓦器の壺(131)が出土した。
(127・128)は(132)の内部から
出土したが、意図的な埋納かど
うかは明らかでない。

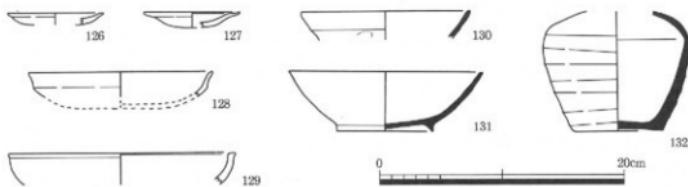


第47図 S K17 遺構実測図 (1/30)

〔S K18〕

S K18はS B 9と重複した位置にあるが、時期的な前後関係は不明である。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸1.26m、短軸0.44m、深さ0.07mを測る。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。



第48図 S K 16・17・19出土遺物実測図

[S K 19] (第48図、図版21)

S K 19はS B 13の南東に近接して位置する。遺構の全容は南側が調査区外に及ぶため不明である。遺構の規模は長軸2.28m、短軸1.46m、深さ0.21mを測る。

遺物は土師器の皿(129)、壺、須恵器の坏蓋、壺、瓦器の塊(130)が出土した。(129・130)以外は細片のため図化できなかった。

[S K 20]

S K 20はS B 13の東2mに位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸1.46m、短軸0.26m、深さ0.05mを測る。

遺物は土師質土器の皿、黒色土器A類の塊、瓦器の塊が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

[S K 21]

S K 21はS K 20の北に近接して位置する。遺構の平面形は瓢形である。遺構の規模は長軸0.68m、短軸0.15m、深さ0.03mを測る。

遺物は須恵器の壺が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S K 22]

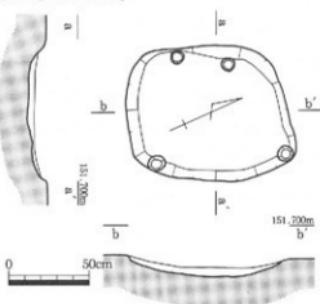
S K 22はS B 12と重複した位置にあるが、時期的な前後関係は不明である。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.86m、短軸0.38m、深さ0.06mを測る。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S K 23] (第49図・図版14)

S K 23はS K 22の東1.5mに位置する。遺構の平面形は隅丸の方形である。遺構の規模は長軸1.04m、短軸0.80m、深さ0.08mを測る。埋土には炭化物を多く含んでいた。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。



第49図 S K 23遺構実測図 (1/30)

〔S K24〕（第50・51図、図版15・21）

S K24はS K23の東に近接して位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.63m、短軸0.55m、深さ0.24mを測る。

遺物は土師質土器、瓦器の塊(133)が出土した。(133)が和泉型瓦器塊II-3に相当することから、13世紀前半の遺構と考えられる。土師質土器は細片のため図化できなかつた。

〔S K25〕

第50図 S K24出土遺物実測図

S K25はS K24の北西2.2mに位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.91m、短軸0.27m、深さ0.04mを測る。

遺物は土師器、須恵器の塊、瓦器の塊が出土したが、いずれも細片のため図化できなかつた。

〔S K26〕

S K26はS B13の北西1.2mに位置する。遺構の平面形はやや歪な長楕円形である。遺構の規模は長軸0.88m、短軸0.36m、深さ0.11mを測る。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図化できなかつた。

〔S K27〕

S K27はS K26の北2.5mに位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.62m、短軸0.44m、深さ0.03mを測る。

遺物は土師質土器、瓦器が出土したが、いずれも細片のため図化できなかつた。

〔S K28〕

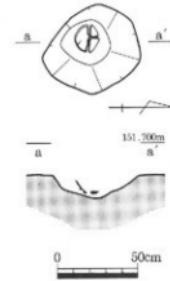
S K28はS K27の南西3mに位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.78m、短軸0.70m、深さ0.08mを測る。

遺物は須恵器の塊が出土したが、細片のため図化できなかつた。

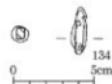
〔S K29〕（第52図、図版22）

S K29は第3調査区の西端に位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.92m、短軸0.49m、深さ0.06mを測る。

遺物は土師器、須恵器の塊、器種不明の鉄製品(134)が出土した。(134)以外は細片のため図化できなかつた。



第51図 S K24
遺構実測図(1/30)



第52図 S K29
出土遺物実測図

(4) ピット

〔S P46〕

S P46はS B 8と重複した位置にあるが、時期的な前後関係は不明である。遺構の平面

形はやや歪な円形である。遺構の規模は径0.40m、深さ0.25mを測る。

遺物は土師器、須恵器、黒色土器B類の塊が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

[S P 47]

S P 47はS P 46の東に近接して位置する。遺構の平面形はやや歪な円形である。遺構の規模は径0.32m、深さ0.10mを測る。

遺物は土師質土器の土釜、黒色土器A類の塊が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

[S P 48]

S P 48はS K 17の西に近接して位置する。遺構の平面形は梢円形である。遺構の規模は長径0.17m、短径0.12m、深さ0.04mを測る。

遺物は須恵器が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P 49]

S P 49はS P 48の北に近接して位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.14m、深さ0.06mを測る。

遺物は土師質土器、黒色土器A類の塊、B類の塊、瓦器が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

[S P 50] (第53図、図版22)

S P 50はS P 49の北東2mに位置する。遺構の平面形は梢円形である。遺構の規模は長径0.36m、短径0.30m、深さ0.23mを測る。

遺物は器種不明の鉄製品(135)が出土した。



第53図 S P 50
出土遺物実測図

[S P 51]

S P 51はS B 9と重複した位置にあるが、時期的な前後関係は不明である。遺構の平面形は梢円形である。遺構の規模は長径0.18m、短径0.12m、深さ0.04mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P 52]

S P 52はS P 51の東に近接し、S B 9と重複した位置にあるが、いずれも時期的な前後関係は不明である。遺構の平面形は梢円形である。遺構の規模は長径0.36m、短径0.12m、深さ0.04mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P 53]

S P 53はS B 9の東に近接して位置する。遺構の平面形は梢円形である。遺構の規模は長径0.25m、短径0.20m、深さ0.25mを測る。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P54〕

S P54はS B10の北に近接して位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.20m、深さ0.15mを測る。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P55〕

S P55はS B11の南に近接して位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.20m、深さ0.16mを測る。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P56〕（第54図、図版22）

S P56はS B9の南に近接して位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.5m、短軸0.27m、深さ0.10mを測る。

遺物は須恵器の壺身(139)が出土した。

〔S P57〕

S P57はS K23の南に近接して位置する。遺構の平面形は梢円形である。遺構の規模は長径0.25m、短径0.21m、深さ0.23mを測る。

遺物は土師器、須恵器が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

〔S P58〕（第54図、図版22）

S P58はS B12の南に近接して位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.25m、深さ0.22mを測る。

遺物は須恵器の甕、土師質土器の皿(136)、瓦質土器の皿が出土した。(136)以外は細片のため図化できなかった。

〔S P59〕

S P59はS P58の南1.8mに位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.26m、深さ0.13mを測る。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P60〕

S P60はS P59の南1.8mに位置する。遺構の平面形は梢円形である。遺構の規模は長径0.24m、短径0.22m、深さ0.22mを測る。

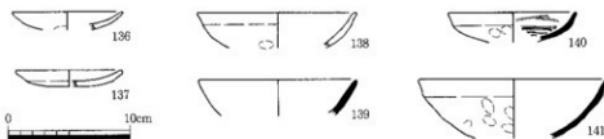
遺物は須恵器の甕、土師質土器、瓦器の碗が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

〔S P61〕

S P61はS P60の北西1.8mに位置する。遺構の平面形は歪な円形である。遺構の規模は径0.26m、深さ0.18mを測る。

遺物は須恵器、土師質土器が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

〔S P62〕



第54図 S P 56 · 58 · 64 · 65出土遺物実測図

S P 62はS P 61の西1.4mに位置する。遺構の平面形は橢円形である。遺構の規模は長径0.18m、短径0.16m、深さ0.15mを測る。

遺物は土師質土器、黒色土器A類が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

[S P 63]

S P 63はS P 62の北東1.2mに位置する。遺構の平面形は歪な円形である。遺構の規模は径0.35m、深さ0.24mを測る。

遺物は土師器、瓦器が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

[S P 64] (第54図、図版22)

S P 64はS P 63の北東1.2mに位置し、S K20を切っている。遺構の平面形は歪な円形である。遺構の規模は径0.25m、深さ0.24mを測る。

遺物は土師質土器の皿(137)、瓦器の塊(140・141)、瓦質土器の皿が出土した。(140)が和泉型瓦器塊IV-4～5に相当することから、14世紀後半の遺構と考えられる。瓦質土器は細片のため図化できなかった。

[S P 65] (第54図、図版22)

S P 65はS P 64の北東2.5mに位置する。遺構の平面形は橢円形である。遺構の規模は長径0.39m、短径0.27m、深さ0.17mを測る。

遺物は土師器の壺(138)、土師質土器の塊が出土した。土師質土器は細片のため図化できなかった。

[S P 66]

S P 66はS P 65の西に近接して位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.35m、短軸0.18m、深さ0.06mを測る。

遺物は須恵器の甕が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P 67]

S P 67はS P 66の西1.8mに位置する。遺構の平面形は歪な円形である。遺構の規模は径0.36m、深さ0.18mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

[S P 68]

S P 68はS P 67の北東1.2mに位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.52m、短軸0.20m、深さ0.05mを測る。

遺物は須恵器の壺が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P69〕

S P69はS P68の北西1.5mに位置する。遺構の平面形は歪な円形である。遺構の規模は径0.24m、深さ0.21mを測る。

遺物は須恵器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P70〕

S P70はS K23の北西に近接して位置する。遺構の平面形は梢円形である。遺構の規模は長径0.17m、短径0.14m、深さ0.10mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P71〕

S P71はS P70の北1.5mに位置する。遺構の平面形は梢円形である。遺構の規模は長径0.17m、短径0.14m、深さ0.10mを測る。

遺物は土師器と須恵器が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

〔S P72〕

S P72はS P71の北西2mに位置する。遺構の平面形は梢円形である。遺構の規模は長径0.45m、短径0.32m、深さ0.10mを測る。

遺物は出土しなかった。

〔S P73〕

S P73はS B12の西に近接して位置する。遺構の平面形は梢円形である。遺構の規模は長径0.18m、短径0.16m、深さ0.16mを測る。

遺物は土師質土器の土釜、黒色土器A類の塊が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

〔S P74〕

S P74はS B13の東に近接して位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.23m、深さ0.17mを測る。

遺物は須恵器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P75〕

S P75はS B13の南に近接して位置する。遺構の南側が調査区外に及ぶため全容は不明である。遺構の規模は長軸0.30m、短軸0.20m、深さ0.05mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P76〕

S P76はS P75の北西1.4mに位置する。遺構の南側が調査区外に及ぶため全容は不明である。遺構の規模は長軸0.27m、短軸0.26m、深さ0.11mを測る。

遺物は土師質土器、黒色土器A類が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

〔S P77〕

S P77はS P76の北西3.6mに位置する。遺構の南側が調査区外に及ぶため全容は不明

である。遺構の規模は長軸0.27m、短軸0.17m、深さ0.14mを測る。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P78〕

S P78はS P77の北に近接して位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.17m、深さ0.12mを測る。

遺物は土師器の甕が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P79〕

S P79はS P78の西に近接して位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.38m、深さ0.12mを測る。

遺物は土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S P80〕

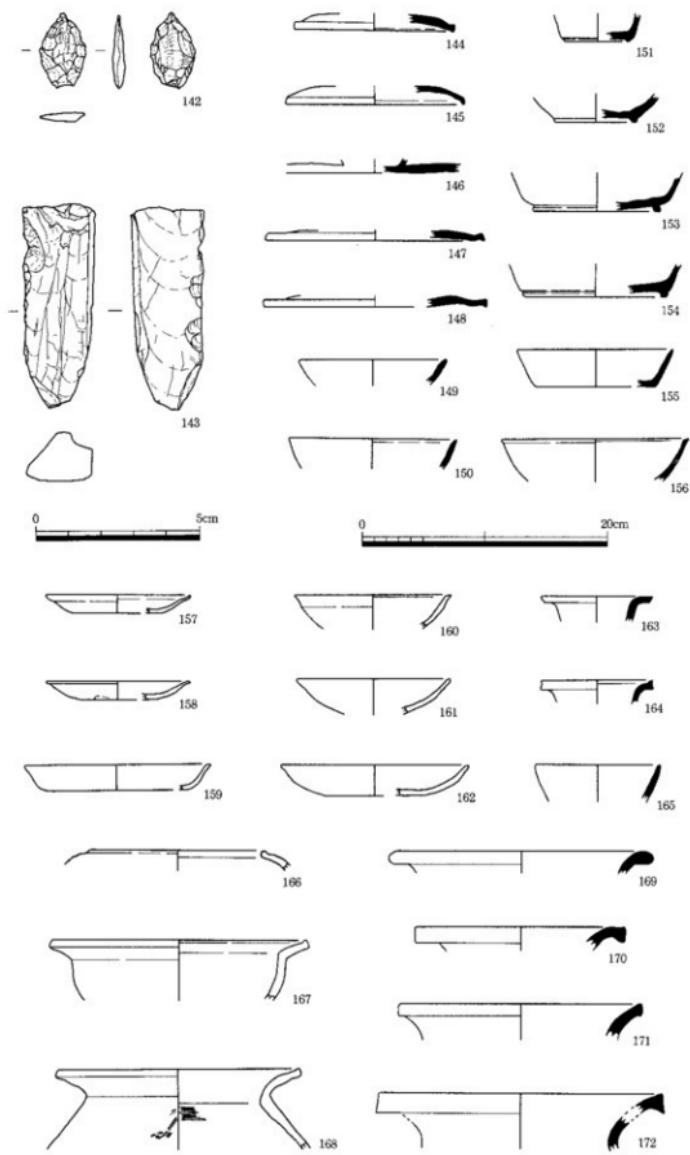
S P80はS P79の北東6mに位置する。遺構の平面形は不整形である。遺構の規模は長軸0.44m、短軸0.41m、深さ0.06mを測る。

遺物は土師質土器、黒色土器A類、瓦器の甕が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

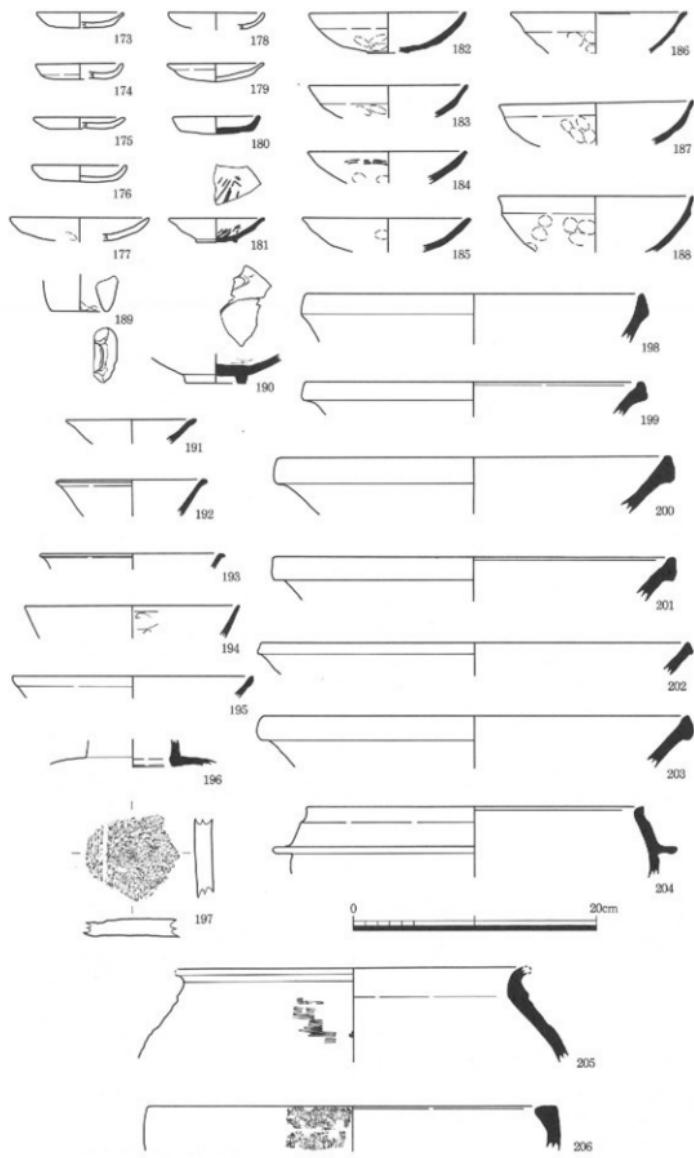
(5) 包含層（第55・56図、図版22・23・24）

包含層からの遺物は石器、須恵器、土師器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、須恵質土器、青磁、白磁、陶器、土製品が出土した。

図化できた遺物にはサヌカイト製石鐵(142)、細部調整剝片(143)、須恵器の坏蓋(144～148)、坏身(149～155)、甕(156)、壺(163～165・169)、甕(170～172)、土師器の皿(157・158)、坏(159～162)、壺(166)、鉢(167)、甕(168)、土師質土器の皿(173～179)、器種不明品(197)、瓦器では皿(180)、甕(181～188)、瓦質土器では土釜(204)、甕(205)、火舍(206)、須恵質土器では東播系の練鉢(198～203)、青磁では龍泉窯系の碗(190・192・194)、白磁では皿(191・193)、碗(195)、陶器では瀬戸の壺(196)、土製品では輪羽口(189)があった。

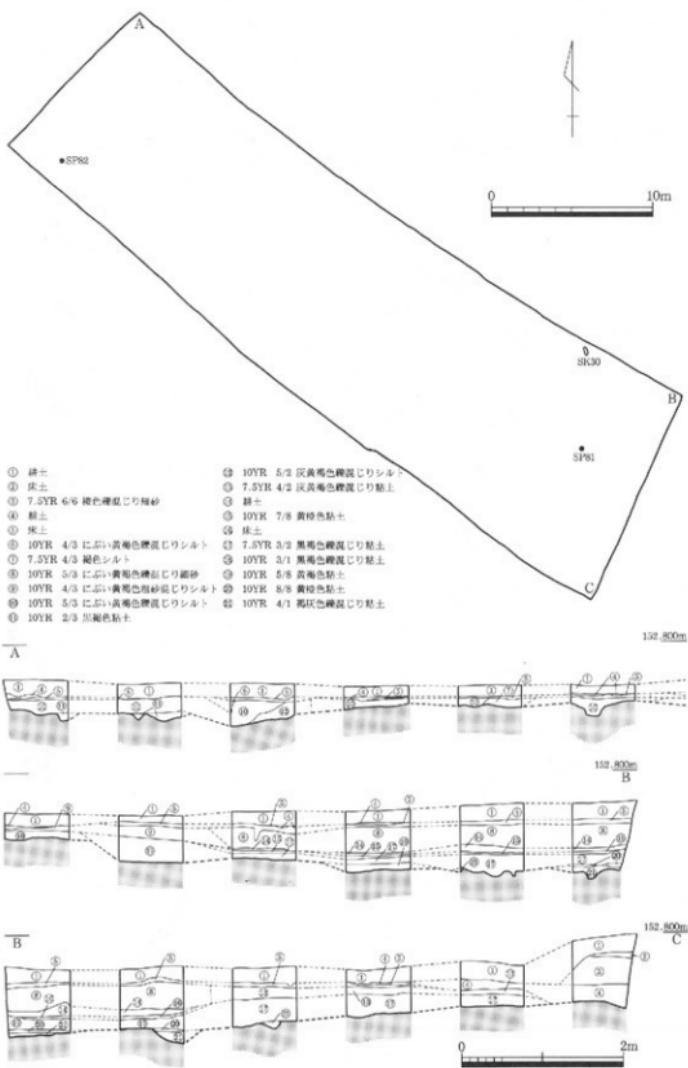


第55図 第3調査区包含層出土遺物実測図（1）



第56図 第3調査区包含層出土遺物実測図（2）

第4節 第4調査区



第57図 第4調査区遺構配置模式図(1/300)及び土層断面実測図(1/60)

遺構と遺物

(1) 土坑

[S K30]

S K30は第4調査区の東に位置する。遺構の平面形は歪な椭円形である。遺構の規模は長径0.54m、短径0.18m、深さ0.05mを測る。

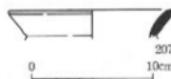
遺物は土師器が出土したが、細片のため図化できなかった。

(2) ピット

[S P81] (第58図、図版24)

S P81はS K30の南6mに位置する。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.22m、深さ0.14mを測る。

遺物は須恵器の短頸壺(207)、壺が出土したが、(207)以外は細片のため図化できなかった。



第58図 S P81出土遺物実測図

[S P82]

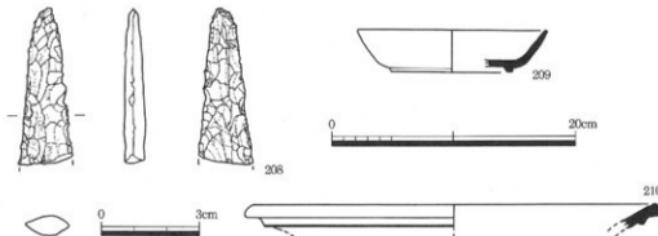
S P82は第4調査区の西端に位置している。遺構の平面形は円形を呈している。遺構の規模は径0.34m、深さ0.10mを測る。

遺物は須恵器の壺身(233)が出土した。なお、図と図版は第5調査区のS S 2から出土したものと接合したのでS S 2の出土遺物(第62図、図版25)として報告している。

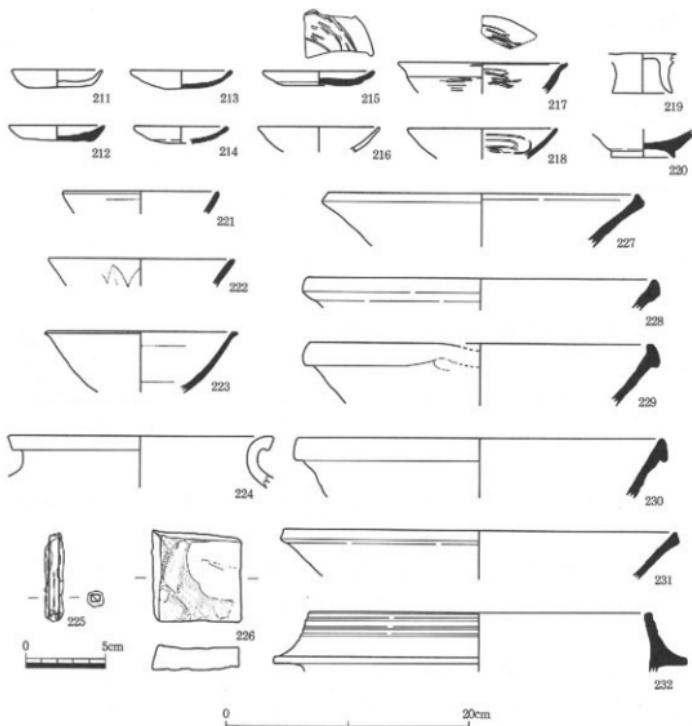
(3) 包含層 (第59・60図、図版24)

包含層からの遺物は石器、須恵器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、須恵質土器、青磁、白磁、鉄製品、石製品が出土した。

図化できたものには、サヌカイト製の石鎌(208)、須恵器の壺身(209)、甕(210)、土師質土器の皿(211)、塊(216)、壺(219)、甕(224)、瓦器の皿(212~215)、塊(217~218)、瓦質土器の土釜(232)、須恵質土器の塊(220)、東播系の練鉢(227~231)、青磁の碗(221・222)、白磁の碗(223)、鉄釘(225)、硯を転用した砥石(226)があった。

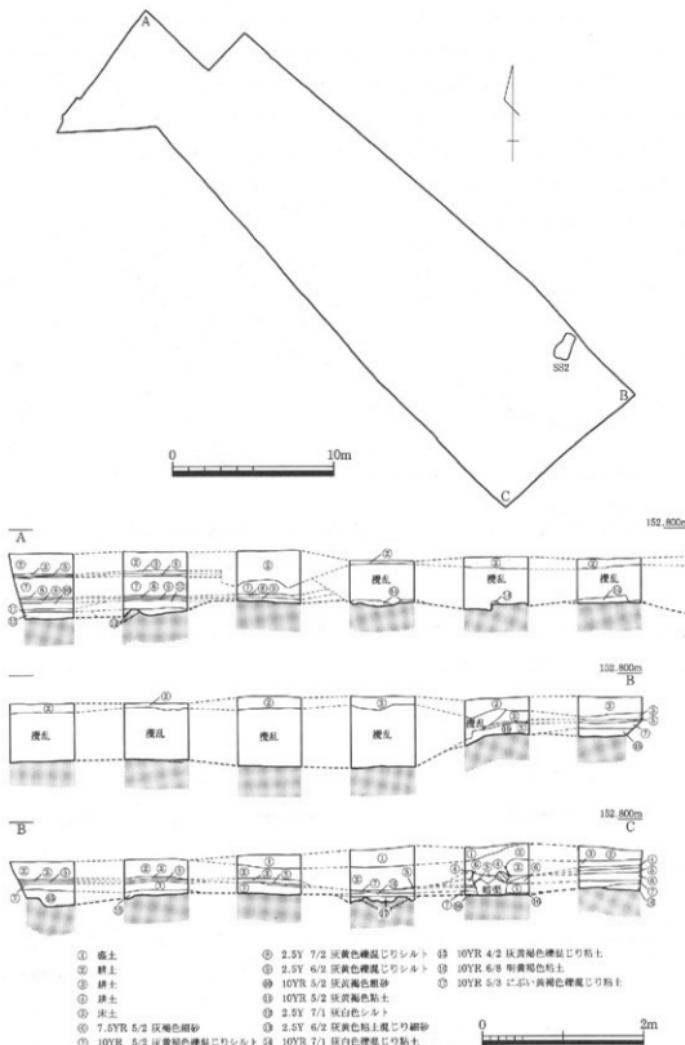


第59図 第4調査区包含層出土遺物実測図 (1)



第60図 第4調査区包含層出土遺物実測図（2）

第5節 第5調査区



第61図 第5調査区構造配置模式図(1/300) 及び土層断面実測図(1/60)

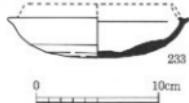
遺構と遺物

(1) 壓穴系小石室

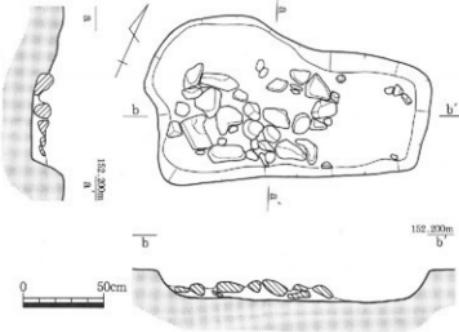
〔SS 2〕（第62・63図、図版16・25）

SS 2は第5調査区の東端に位置する。遺構の平面形はやや歪な隅丸の長方形である。遺構の内部には碌床があり、検出状況から第1調査区のSS 1と同様、竪穴系小石室の可能性がある。しかし、碌の目地の間隔と碌床の底部がやや不揃いで、平坦面も持たないため、断定はできない。遺構の規模は、長軸1.70m、短軸0.57m、深さ0.20m、使用された石で最大のものは24cm×15cm×10cmを測る。軸方向はN-30°-Eを示す。

遺物は須恵器の坏(233)が出土した。(233)が陶邑編年III-5に相当することから、7世紀後半の遺構と考えられる。



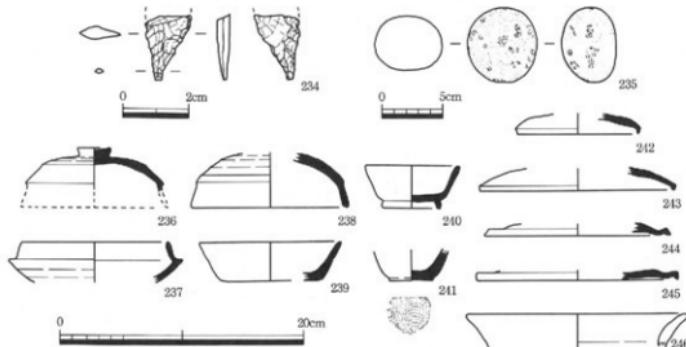
第62図 SS 2
出土遺物実測図



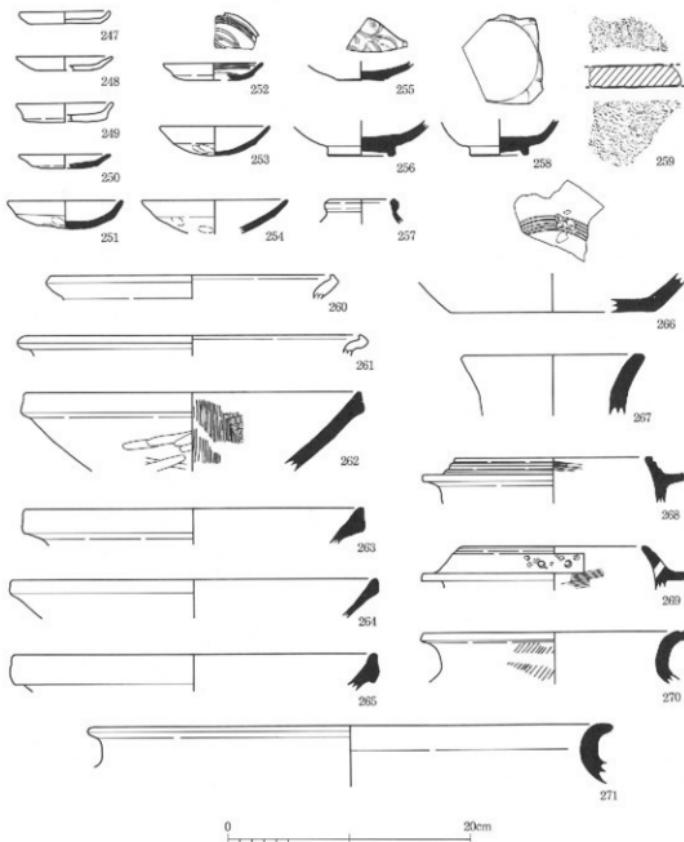
第63図 SS 2 遺構実測図 (1/30)

(2) 包含層（第64・65図、図版25）

包含層からの遺物は石器、石製品、須恵器、土師器、土師質土器、瓦器、須恵質土器、瓦質土器、青磁、陶器、瓦が出土した。



第64図 第5調査区包含層出土遺物実測図 (1)



第65図 第5調査区包含層出土遺物実測図（2）

固化できたものには、凸基無基式の石鎌(234)、叩石(235)、須恵器の坏蓋(236・238・242~245)、坏身(237・239・240)、壺(241)、土師器の甕(246)、土師質土器の皿(247~249)、紀伊産の土釜(260・261)、瓦器の皿(251・252)、塊(253・254)、須恵質土器の束縛系の練針(263~265)、壺(267)、瓦質土器の皿(250)、擂鉢(262)、土釜(268・269)、甕(270・271)、青磁の皿(255)、碗(256・258)、備前的小壺(257)、瀬戸の深皿(266)、平瓦(259)があった。

第3章 自然科学

第1節 高向遺跡における考古地磁気年代推定

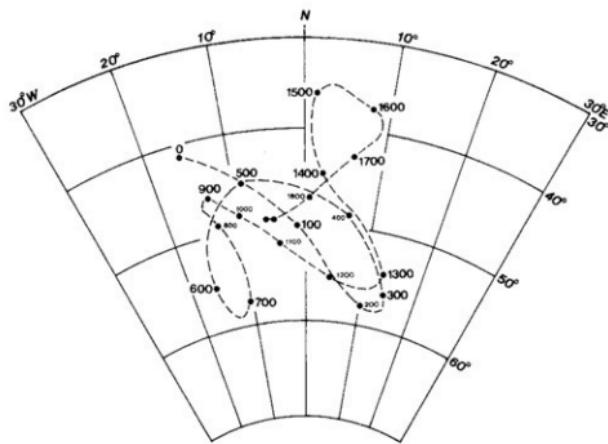
高向遺跡で発掘調査された遺構の焼土から、考古地磁気年代推定用の試料を、平成6年7月22日に採取した。その熱残留磁気測定結果および年代推定の結果について報告する。

1. 考古地磁気年代推定の原理

磁石は北を指す。地磁気(地球磁場)が存在するためである。地磁気はベクトル量で、ある地点における地磁気を記述するには、方向(偏角と伏角)と大きさ(全磁力)が必要である。一般に、磁気コンパスが北として示す方向(磁北)は、真北(地図の経線方向)からずれている。この磁北と真北の間の角度が偏角である。磁針をその重心で支え、磁南北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のN極が水平面の下になるよう傾く。この傾斜角が伏角である。河内長野市の現在の偏角は約6.7°Wで、伏角は約48°である。また、全磁力は、約0.45エルステッドである。これら地磁気の三要素(偏角・伏角・全磁力)は観測する地点によって異なる値になる。全世界の地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気の分布は、地球の中心に棒磁石を置いたときにできる磁場分布に近似される。この棒磁石の軸方向は、自転軸から約11.5°傾いている。この磁軸と地表との交点が地磁気北(南)極である。

地磁気は絶えず変動し、時代と共にその地磁気北極の位置を変える。従って、ある地点で観測される偏角・伏角の値も時代と共に変化する。方向だけではなく、大きさ(全磁力)も変化する。この変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

歴史時代の地磁気永年変化は、岩石や焼土の残留磁化の測定を基礎とする考古地磁気測定によって明らかにすることができます。どんな物質でも、ある(強)磁場中に置かれると磁気を帯び、そして磁場が取り除かれると、普通の物質からは磁気が消える。しかし、強磁性物質(磁石になれる物質)では、外部磁場が消えても磁気が残る。これが残留磁気である。残留磁気の強さや安定性は、磁場中に置かれた時の状態によって異なる。残留磁気はその獲得方法の違いによっていろいろな名前で呼ばれる。考古地磁気学で地磁気の化石として最もよく利用するのは、熱残留磁気である。岩石には小量の強磁性粒子(赤鉄鉱や磁鉄鉱などの鉄の酸化物)が含まれている。火成岩では、高温のマグマの状態から冷えて岩石になる過程で、強磁性粒子がその時の地磁気によって磁気を帯び、冷えてからはその残留磁気を保持し続ける。これが熱残留磁気である。土も焼かれると、冷却の過程で同様の熱残留磁気を獲得する。熱残留磁気の性質を簡単にまとめると、次のようになる。岩石の誕生



第66図 広岡(1977)による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線

時または土が焼かれた時の地磁気方向を記録していて、その大きさは地磁気の大きさに比例し、何億年もの長い期間でも変質しないということになる。これらの性質によって、地磁気の化石として利用が可能なのである。広岡(1977)によって遺跡の焼土の熱残留磁気測定から得られた、過去2000年間の西南日本での、偏角・伏角の変化を第66図に示す。偏角は $20^{\circ}W$ から $15^{\circ}E$ 、伏角は 35° から 60° の間で変化している。

年代がよく分かっている遺跡の焼土や火山岩などの熱残留磁気測定から、第66図のような地磁気永年変化の標準曲線が得られると、逆に、年代の確かでない遺跡の焼土の残留磁気を測定し、永年変化曲線と比較することで、その年代の推定を行うことができる。これが考古地磁気による年代推定である。この方法は、¹⁴C法やフィッショントラック法のように、それだけで独立して年代が決定できるものではない。偏角と伏角の値から年代が独立に一つだけ決定されるということはないのである。普通、偏角と伏角の組合せで永年変化曲線から2つか3つの年代が出てくる。そのうちの何れを取るかは、考古学的推定に頼ることになる。

2. 試料の採取と測定

(1) 試料の採取と整形

各遺構の焼土からの熱残留磁気測定用試料を、次の様な手順で採取した。

- ①一辺数cmの立方体試料を取り出すため、瓦用ハンマーを用いて、試料のまわりに溝を掘る。
- ②薄く溶いた石膏を、試料全体にかけ試料表面を補強する。
- ③やや堅め(練りハミガキ程度)の石膏を試料上面にかけ、すばやく一辺5cmの正方形

のアルミ板を押しつけ、石膏が固まるまで放置する。

- ④石膏が固まつた後、アルミ板をはずし、その平面の最大傾斜の方位と傾斜角を磁気コンパス(考古地磁気用に改良したクリノメータ)で測定し、方位を記録すると同時に、試料上面に方位を示すマークと試料番号を記入する。
- ⑤試料を掘り起こした後、試料の底面にも石膏をつけて補強し、研究室に持ち帰る。
- ⑥持ち帰った試料は、ダイヤモンド・カッターを用いて、冷却水をかけながら一辺3.5cmの立方体に切断する。切断面が崩れないように、一面ごとに石膏で補強し、しっかりした試料をつくる。

(2) 热残留磁気測定とデータ整理

試料の热残留磁気の測定には、リング・コア型スピナー磁力計(SMM-85)を使用した。測定結果として得られるデータは、試料に設定した座標に対するものなので、試料を遺構のものとの位置に戻した時の真北を基準方向とする座標に対するものに変換しなければならない。そのためには、試料が残留磁気を獲得した時の位置(地理的緯度、経度)、および方位(試料の一つの基準面の走向、傾斜)が必要である。位置については、2万5千分の1程度の縮尺の地形図から、その遺構の緯度、経度を読み取ればいい。方位は、上の④の作業で磁気コンパスを使って測定している。磁気コンパスの方位は、磁北に対するものなので、真北に対する方位に直すために、試料採取地点の現在の偏角分を補正する必要がある。現在の地磁気偏角は、国土地理院の偏角分布の実験式から求めることができる。

測定にはいろいろな要因での誤差がつきものであるため、1つの遺構から8~10個程度の試料を採取している。これらの試料の個々の測定で得られた偏角(Di)、伏角(Ii)から平均値(Dm, Im)を求める。ここで用いる統計学的方法はFisherによって確立されたものである。各試料の測定値を、方向(Di, Ii)の単位ベクトルとして取り扱う。

まず、n組の(Di, Ii)より

$$N = \sum \cos Ii \cdot \cos Di \quad (\text{北向きの成分})$$

$$E = \sum \cos Ii \cdot \sin Di \quad (\text{東向きの成分})$$

$$Z = \sum \sin Ii \quad (\text{鉛直の成分})$$

を求めると、合ベクトルの大きさR、およびDm, Imは、

$$R = (Z^2 + N^2 + E^2)^{1/2}$$

$$Dm = \tan^{-1} E / N$$

$$Im = \sin^{-1} Z / R \text{ で与えられる。}$$

このとき、信頼度係数kは、

$$k = (n-1) / (n-R) \text{ となる。}$$

kが大きいほど、方向の集中はよい。よく焼けた窯跡では100以上の値になる。

誤差角 α_{th} は、危険率5%として、

$\alpha_m = \cos^{-1} [1 - (n-R) \{ (20)^{2/(n-1)} - 1 \} / R]$ で与えられる。

α_m が小さいほど、方向の集中はよい。よく焼けた窯跡では数度以内になる。

これより D_m 、 I_m のそれぞれの誤差の幅として、

$$\delta D = \alpha_m / \cos I_m \quad (\text{偏角誤差})$$

$$\delta I = \alpha_m \quad (\text{伏角誤差}) \quad \text{が求められる。}$$

以上のようにして得られた計算結果を、1つの遺構を代表する考古地磁気データとしている。

なお、考古地磁気年代推定の原理や測定方法については、中島・夏原(1981)に詳しく解説されている。

3. 热残留磁気測定結果

発掘調査された遺構の焼土から計18個の考古地磁気用の定方位試料を採取し、その熱残留磁気を測定した。熱残留磁気測定結果を第2表、第3表、第67図にまとめた。試料の方位を磁気コンパスで測定しているため、残留磁化測定で得られる偏角は、磁北に対する角度である。これを真北に対する角度に補正するには、試料採集地点の現在の地磁気偏角を知ることが必要である。今回は、国土地理院の1990年の磁気偏角図から読み取った6.7°Wを使用した。第2表と第3表の偏角は、補正後の値である。

S Y 1

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	強度 $\times 10^{-3}$
OSK-61	-1.3	56.7	2.40
OSK-62	4.3	59.9	3.08
OSK-63	3.9	53.3	2.28
OSK-64	-6.7	54.9	1.61
OSK-65	-3.1	47.9	0.81
OSK-66	13.6	47.7	0.41
OSK-67	-15.3	61.2	0.81
OSK-68	7.4	56.5	0.95
OSK-69	-7.2	46.9	1.28

S Y 2

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	強度 $\times 10^{-3}$
OSK-71	3.9	58.9	0.92
OSK-72	6.6	54.3	2.05
OSK-73	10.0	58.9	1.26
OSK-74	7.3	57.5	2.40
OSK-75	2.6	57.3	1.64
OSK-76	-2.0	54.8	1.34
OSK-77	-13.7	53.3	0.90
OSK-78	-8.1	58.4	0.96
OSK-79	-3.2	59.9	1.12

第2表 热残留磁気測定結果

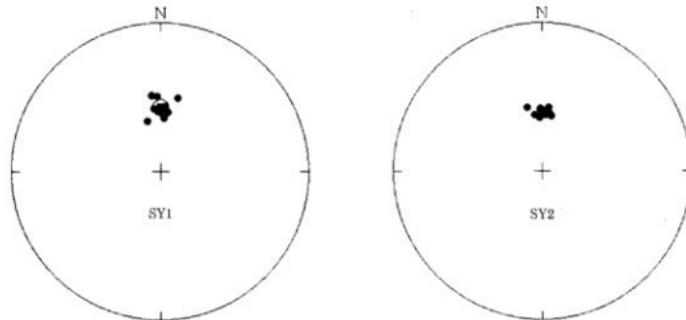
遺構名	試料数 n	D_m (° E)	I_m (°)	α_m (°)	k	平均磁化強度 $\times 10^{-6}$ emu
① S Y 1	9	-0.2	54.2	4.7	120.6	1.51
② S Y 2	9	0.3	57.3	3.1	276.1	1.40
③ 全試料	18	0	55.5	2.7	166.9	

第3表 考古地磁気測定結果

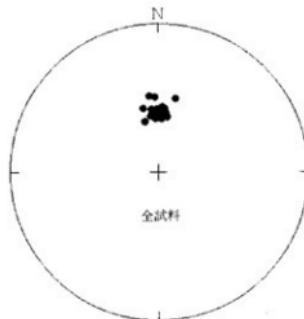
第2表は、個々の試料の熱残留磁気測定結果(Di, II)である。第3表に、各遺構についての、磁気方向の平均値(Dm, Im)、誤差角(α_{se})と信頼度係数(k)、および平均磁気強度を示した。第3表の試料数nは平均値(Dm, Im)を計算した試料数である。

今回の測定結果の偏角と伏角の平均値についての信頼度係数は小さく、誤差角 α_{se} は3°以上と大きく信頼度の低いデータといえる。誤差角が大きくなった原因是、焼成温度は平均磁化強度からままで高温であったと推定できるが、焼けそのものが薄かったことが考えられる。このことから個々の遺構での推定年代を出すことは不適当と思われるため、時期のみを提示することにした。また、採取した2遺構が同時期に火を受けたと仮定して、全試料の測定結果で平均磁化方向を計算して年代推定を試みた。第68図は全測定結果の等面積投影図である。

全試料からの計算結果では、誤差角 α_{se} も2.7°とまことに小さく、第69図からあきらかに永年変化曲線とよく一致している。この曲線が正しいとするとA.D.1150±50年の年代が得られる。第3表と第4表の最後にその結果を付記した。

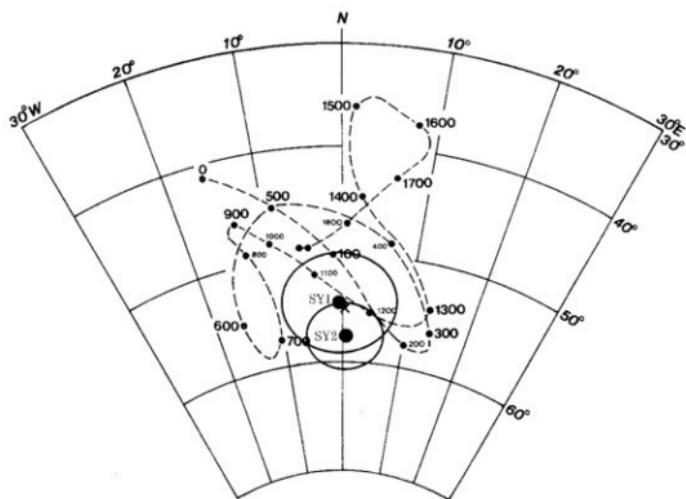


第67図 各遺構ごとの各試料の残留磁化方向の等面積投影図



第68図 全試料の残留磁化方向の等面積投影図

ここに示している推定年代の土の年代幅は、推定年代がこの幅の中に必ず入ることを意味しているのではなく、この年代幅の中ならどの年代をとってもおかしくない範囲を示しており、これをこえる可能性も充分あることを意味していることに注意していただきたい。



第69図 地磁気永年変化曲線と各遺構の平均磁化方向(●印)と全遺構の平均磁化方向(×印)

	遺構名	考古地磁気推定年代(A.D.)
①	S Y 1	12世紀中頃
②	S Y 2	12世紀中頃
③	全試料	1150±50年

第4表 考古地磁気年代推定結果

[引用文献]

- 広岡公夫(1977)：考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、15、200-203。
 中島正志・夏原信義(1981)：考古地磁気年代推定法、ニュー・サイエンス社、95p.
 Shibuya, H. (1980) : Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism. 大阪大学基礎工学部修士論文, 54p.

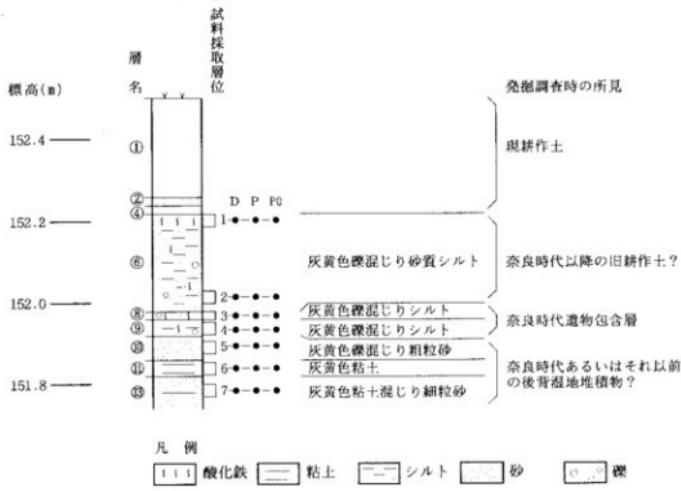
第2節 高向遺跡における古環境

はじめに

高向遺跡は、石川左岸に広がる中低位段丘面上に位置する旧石器～中世に至る複合遺跡である。遺跡の範囲は段丘面全体に及んでおり、これまでの発掘調査により、奈良時代・平安時代・中世の遺構が段丘縁辺部の一部に限って分布していること、鎌倉時代初頭には建物をはじめとする遺構の分布域が広がることが確認されている。また、今回発掘調査が行われた第1～3調査区でも、飛鳥・奈良時代から鎌倉時代の掘立柱建物群が確認されている。このように段丘上に分布していた集落の状況が確認されつつあり、当時の自然環境の復元が課題となっている。そこで、今回の調査では奈良時代前後の古環境と当時の土地利用状況に関する情報を得ることを目的として、第3調査区・第5調査区において珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施した。

1. 試料

基本土層試料は、明瞭に観察された第5調査区北壁から採取された。第5調査区基本土層は、主にシルトから構成されるが、砂礫が混入したり、砂がレンズ状に狹在する。下位から、奈良時代あるいはそれ以前の落ち込みとされる層（後背湿地堆積物：⑩・⑪・⑬層）、奈良時代遺物包含層（⑧・⑨層）、奈良時代以降の旧耕作土の可能性がある土層（⑥層）、



第70図 第5調査区北壁の基本土層と分析試料採取層位

現代の耕作土層（①・②・④層）が認められる（第70図）。このうち、奈良時代あるいはそれ以前の落ち込みとされる層は層厚の薄い土層で構成され、途中で尖滅する。また、奈良時代遺物包含層も層厚が薄い。奈良時代以降の旧耕作土の可能性がある⑥層は、現耕作土層とともに層厚が厚い。試料は、⑥層以深より層位試料で7点を採取した。分析の際は、7点を分割して各分析項目用の試料とした。

また、第3調査区では奈良時代遺構覆土1点を採取し、珪藻分析用の試料とした。

以上のように、分析試料は珪藻分析が8点、花粉分析（イネ属同定を含む）・植物珪酸体分析が各7点である。

2. 分析方法と結果の表示方法

（1）珪藻分析

試料を湿重で約5g秤量し、過酸化水素水、塩酸の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適当量計り取りカバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（珪藻化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot (1986・1988・1991a・1991b)、K.Krammer (1992)などを用いる。同定結果は、産出種をアルファベット順に並べた一覧表で示す。

堆積環境の解析に当たり、塩分濃度に対する適応性から産出種を海水生種、海水～汽水生種、汽水生種、淡水生種に分類し、淡水生種については更に塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応性に基づいて生態区分する。堆積環境の解析に当たっては、安藤（1990）、伊藤・堀内（1991）の環境指標種などを参考とする。

（2）花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、簡別、重液（臭化亜鉛・比重2.2）による有機物の分離・フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して、出現する全ての種類について同定・計数する。また、検出されるイネ属花粉については、ノマルスキー微分干渉装置を使用して表面微細構造を観察し、発芽孔周辺の肥厚状況・花粉粒径を考慮しながら、栽培種のイネ属と他のイネ科に区分する。結果は、本文中に記述する。

（3）植物珪酸体分析

湿量5g前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理、沈定法、重液分

離法の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、ブリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

3. 細化石の産状

(1) 硅藻分析

種類	生長性 塩分	環境 pH 流水	第3調査区		第5調査区				
			⑥層上	⑥層下	⑧層	⑨層	⑩層	⑪層	⑫層
			1	2	3	4	5	6	7
Achnanthes exigua Grunow	Ogh-ind al-il:ind	S	-	-	-	1	-	-	-
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh-ind al-il:ind	U	-	-	-	1	-	-	-
Amphora montana Krasske	Ogh-ind ind ind	RA	-	-	-	1	-	-	-
Caloneis leptosoma Kramer & Lange-Bertalot	Ogh-ind ind l-ph	RB	-	-	-	1	-	-	-
Caloneis sp.	Ogh-unk unk unk	RI	-	-	-	-	-	1	-
Cybellia sinuata Gregory	Ogh-ind ind r-ph	K,T	-	-	-	1	-	-	-
Fragilaria brevistriata Grunow	Ogh-ind al-il:l-ph	U	-	-	-	1	-	-	-
Fragilaria capucina var. gracilis (Oestr.) Hustedt	Ogh-ind al-il:l-ph	T	-	-	1	-	-	-	-
Gomphonema angustatum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind al-il:ind	U	1	-	-	-	-	-	-
Navicula confervacea (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind al-bl:ind	RB,S	-	-	1	-	-	-	-
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind al-il:ind	RA,T	1	-	-	-	-	-	-
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind al-il:ind	U	1	-	1	1	-	-	1
Navicula elginiensis (Greg.) Ralfs	Ogh-ind al-il:ind	O,U	-	-	-	-	-	-	1
Navicula pupula Kuetzing	Ogh-ind ind ind	S	-	-	1	-	-	-	1
Navicula seminum Grunow	Ogh-ind ind ind	RB,S	-	-	-	1	-	-	-
Navicula spp.	Ogh-unk unk unk	-	1	1	1	-	-	-	-
Neidium spp.	Ogh-unk unk unk	-	-	-	-	1	-	-	-
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind al-bl:ind	S	-	-	-	1	-	-	-
Nitzschia spp.	Ogh-unk unk unk	-	1	-	-	-	-	-	-
Pinnularia schoenfelderi Kramer	Ogh-ind ind ind	RI	-	-	2	-	-	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk unk unk	-	1	-	-	-	-	-	-
Rhopseudia gibberula (Ehr.) O.Müller	Ogh-hil al-il:ind	-	-	-	1	-	-	-	-
Stauroneis nobilis Schumann	Ogh-hob ac-il:ind	-	1	-	-	-	-	-	-
Synedra ulna (Kuetz.) Ehrenberg	Ogh-ind al-il:ind	U	-	-	1	-	-	-	-
海水生種合計			0	0	0	0	0	0	0
海水-汽水生種合計			0	0	0	0	0	0	0
汽水生種合計			0	0	0	0	0	0	0
淡水生種合計			6	1	4	16	0	0	0
珪藻化石総数			6	1	4	16	0	0	0

凡例

H.R.: 塩分濃度に対する適応性	pH: 水素イオン濃度に対する適応性	C.R.: 流水に対する適応性
Ogh-hil: 貧塩好塩性種	al-bl: 好塩好水性種	l-ph: 好止水性種
Ogh-ind: 貧塩不定性種	al-il: 好7%耐性種	ind: 流水不定性種
Ogh-hob: 貧塩嫌塩性種	ind - sp: 不定性種	r-ph: 好流水性種
Ogh-unk: 貧塩不明種	ac-il: 好酸性種	unk: 流水不明種
	unk : pH不明種	

環境指標種

- K: 中～下流地河川指標種 0: 沼澤湿地付着生種（以上は安藤, 1990）
- S: 好汚濁性種 U: 広適応性種 T: 好清水性種（以上はAsai, K. & Watanabe, T. 1995）
- RI: 陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群、伊藤・堀内, 1991)

第5表 第3調査区遺構内及び第5調査区北壁基本土層の珪藻分析結果

結果は、第3表に示す。第3調査区遺構内および第5調査区基本土層の珪藻化石の産出は極めて少ない。とくに、第5調査区基本土層⑨層以深は無化石の試料が多い。また、産出する化石の保存状態も悪く、壊れたり溶解を受けているものが多い。産出種の生態性についてみると、陸上の乾いた好機的環境に耐性のある陸生珪藻のA群やB群（伊藤・堀内、1991）、止水や流水水中から見いだされる流水不定性種などがわずかに産出する。

（2）花粉分析

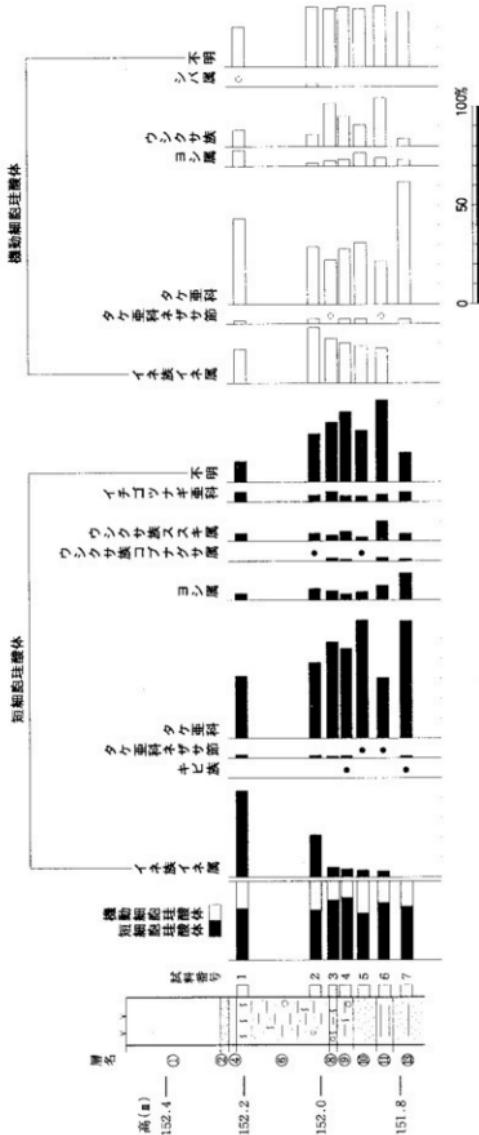
同定の結果、分析を行った7試料からは、花粉化石およびシダ類胞子の化石は全く検出されなかった。

（3）植物珪酸体分析

結果を第6表に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるが、保存状態は不良であり、表面に多数の小孔（溶食痕）が生じている。

種類	層位 試料番号	層位						
		⑥層上 1	⑥層下 2	⑧層 3	⑨層 4	⑩層 5	⑪層 6	⑫層 7
イネ科葉部短細胞珪酸体								
イネ族イネ属	98	43	18	19	10	10	—	—
キビ族	—	—	—	2	—	—	—	1
タケ亜科ネザサ節	4	3	4	6	2	1	3	3
タケ亜科	71	77	171	200	167	94	153	—
ヨシ属	8	12	17	15	12	24	36	—
ウシクサ族コブナグサ属	—	2	6	5	1	6	3	—
ウシクサ族ススキ属	9	8	11	22	6	32	10	—
イチゴンナギ亞科	11	7	18	14	8	12	13	—
不明キビ型	10	17	38	58	16	41	8	—
不明ヒゲシバ型	6	19	41	57	28	46	16	—
不明ダンチク型	8	14	28	43	30	41	15	—
イネ科葉身機動細胞珪酸体								
イネ族イネ属	21	33	25	24	36	21	—	—
タケ亜科ネザサ節	2	3	1	3	5	1	3	—
タケ亜科	53	34	25	33	60	26	75	—
ヨシ属	10	2	3	4	13	5	4	—
ウシクサ族	10	7	24	18	21	29	5	—
シバ属	1	2	—	—	—	—	—	—
不明	25	36	33	36	57	37	34	—
合計								
イネ科葉部短細胞珪酸体	225	202	352	441	280	307	258	—
イネ科葉身機動細胞珪酸体	122	117	111	118	192	119	121	—
総計	347	319	463	559	472	426	379	—
組織片								
イネ属頸珪酸体	19	7	2	2	—	—	—	—
イネ属短細胞列	5	2	—	—	—	—	—	—
イネ属機動細胞列	1	—	—	—	—	—	—	—

第6表 第5調査区北壁基本土層の植物珪酸体分析結果



出現率は、短鎖脱氧核糖体、機能細胞生核体の総数を基準として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の割合を示す。

第71図 第5調査区北壁基本土層の植物珪酸体組成

試料番号7（⑬層）では、タケ亜科が優占し、ヨシ属やウシクサ族（コブナグサ属、スキ属）などが認められる。試料番号6（⑪層）では、同様な種類が認められるが、タケ亜科の割合が減少し、栽培植物のイネ属が出現する。試料番号5～3（⑩～⑧層）もほぼ同様な組成を示し、イネ属も連續して認められる。試料番号2・1（⑥層）では、タケ亜科とともにイネ属の産出が目立つ。

4. 考察

第5調査区基本土層試料からは、植物珪酸体は良好に検出されたが、珪藻化石・花粉化石はほとんど検出されなかった。このような化石の産状の違いは、珪藻化石・花粉化石ともわずかに検出された化石の保存状態が悪く、珪藻と同じ成分からなる植物珪酸体も保存状態が悪かったことから、堆積後に何らかの風化作用の影響を受けて分解消失したことによるものと、考えられる。

奈良時代かそれ以前とされる⑬層では、当時の調査地点が石川に注ぐ小河川がつくる浅い谷で、屑物の供給の多い不安定な環境であったと推定される。珪藻遺骸はシルトサイズ以下の微細粒子と拳動を共にする（小杉、1989）ことから、粗粒物質が堆積するような流速の速い環境では堆積しないで、微細粒子と共に流下してしまった可能性が、上記した分解以外の理由として考えられる。また、堆積物が東側で薄くなることから、流路は調査区の西側に存在した可能性がある。

当時の流路沿いには湿潤な場所に生育するヨシ属やコブナグサ属が生育していたと考えられる。また、ネザサ節を含むタケ亜科が比較的高率に出現したこと、ネザサ節が地面に光の射す開けた場所に生育する（室井、1960）ことなどから、周囲には林分で覆われない開けた草地のような場所も存在したことが推定される。なお、タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科植物と比較して風化に強く、生産量も多い（近藤、1982；杉山・藤原、1986）ことから、植物珪酸体群集では他の種類に比較して過大に評価されている可能性があり、植生の中でタケ亜科が優占していたことを意味するのではないことを留意されたい。

その上位の同時期の⑪層からは、イネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が出現した。特に機動細胞珪酸体の出現率は、現代のイナワラ堆肥連用（8年間、500kg/10a/年）の水田土壤表層でみられるイネ属機動細胞珪酸体の出現率の16%（近藤、1988）とほぼ同率である。調査区内では畦畔などの稲作関連施設は認められていないが、このようなイネ属の産状から調査区内および周辺では稲作が行われていた可能性がある。また、本層準ではヨシ属が減少し、スキを含むウシクサ族が増加している。この変化がイネ属の増加と連動している変化だとすれば、当時の調査区はスキ属などのウシクサ族が生育する乾いた場所へと変化し、稲作が行われるようになった可能性が考えられる。植物珪酸体の変化は局所的な植生変化を反映している可能性が強いことから、今後調査地点を増やして検証する必要がある。

奈良時代遺物包含層の⑨層や⑩層では、⑪・⑫層と同様にイネ属が多産した。このことから、当時の調査区内、ないしその近辺では稲作が行われていたことが推定される。

奈良時代以降の旧耕作土の可能性が強い⑥層では、イネ属の植物珪酸体が他の層準に比較して最も高率に出現した。このことは調査地点が耕作地として利用されていたことを示しており、前時期に比較して、集約度の高い稲作が行われていた、あるいは長期間にわたって稲作が行われていたことが示唆される。

一方、第3調査区の後背中湿地の縁辺部の堆積物からは珪藻化石が検出されなかったことから、堆積域の古環境を特定することはできない。この原因については不明であるが、上記したような堆積後の分解などの原因が考えられる。

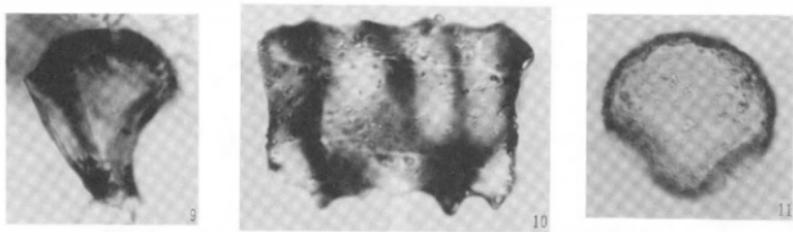
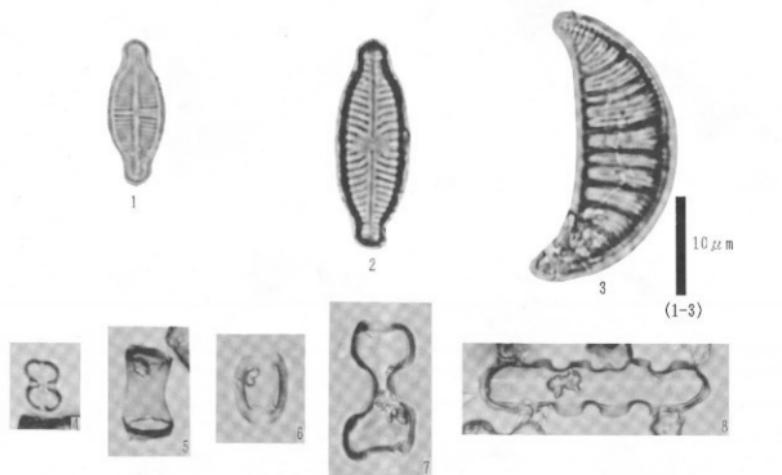
以上、今回の調査の結果から第3調査区近辺では、奈良時代以前の時期から稲作が継続して行われていたことが推定された。このことは第3調査区が位置する段丘中南部の開発は奈良時代以前の時期に及んでいたことを示しており、北側に同時期の集落域が位置することからみて、本地域は生産域として利用されていたことが推定される。ただし、今回の調査では珪藻化石・花粉化石とも多くの情報を得ることができなかったことから、その様態や周辺森林植生について言及することはできなかった。これについては、第5調査区北側に広がる後背湿地の堆積物を対象とし、珪藻・花粉・植物珪酸体分析などを実施することが必要である。

本遺跡周辺は旧石器時代以降の各時期の遺跡が分布しており、地形発達や古環境の変遷を把握するのに良い地域である。とくに稲作開始時期以降は、各時期の村落景観を復元することができそうである。そのためには今後も後背湿地を中心とした発掘調査地点で今回と同様の分析調査を行い、時空的な古環境解析を行う必要がある。

〈引用文献〉

- Asai,K.& Watanabe,T. (1995) : Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.
- 安藤一男 (1990) : 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p. 73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) : 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 硅藻学会誌, 6, p. 23-45.
- 近藤鍊三 (1982) : Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究. 昭和56年度科学的研究費（一般研究C）研究成果報告書, 32p.
- 近藤鍊三 (1988) : 十二遺跡の植物珪酸体分析. 鍛師屋遺跡群十二遺跡—長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書, p.377-383, 御代田町教育委員会.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆 (1986) : 植物珪酸体分析、その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.

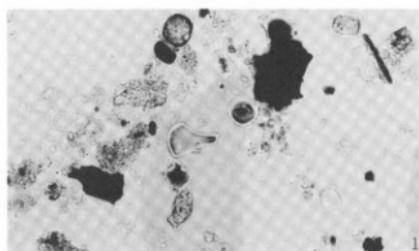
- 小杉正人（1989）珪藻化石群集の形成過程と古生態解析. 日本ペントス研究会誌, 35/36, p.17-28.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) : Bacillariophyceae, teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) : Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaeae, Suriellaceae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) : Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) : Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. (1992) : PLNNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26.p.-353.BERLIN·STUTTGART.
- 室井 緯（1960）：竹笹の生態を中心とした分布. 富士竹類植物園報告, p.103-122
- 杉山真二・藤原宏志（1986）：機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎試料として一. 考古学と自然科学, 19,p.69-84.



50 μm
(4-11)

- | | |
|---|--|
| 1. <i>Achnanthes exigua</i> Grunow(8層;3) | 2. <i>Navicula elginensis</i> (Greg.) Ralfs(11層;6) |
| 3. <i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O. Muller(8層;3) | |
| 4. イネ属短細胞珪酸体(6層上;1) | 5. タケ亞科短細胞珪酸体(6層上;1) |
| 6. ヨシ属短細胞珪酸体(11層;6) | 7. ススキ属短細胞珪酸体(11層;6) |
| 8. イチゴンナギ亞科短細胞珪酸体(13層;7) | 9. イネ属機動細胞珪酸体(6層上;1) |
| 10. ネザサ節機動細胞珪酸体(10層;5) | 11. ヨシ属機動細胞珪酸体(9層;4) |

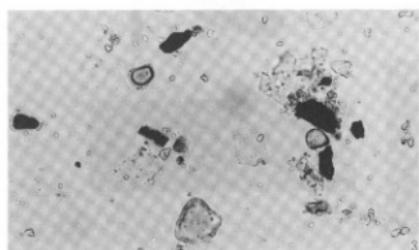
第72図 硅藻化石・植物珪酸体



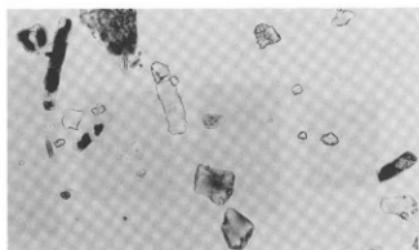
1. 6層上



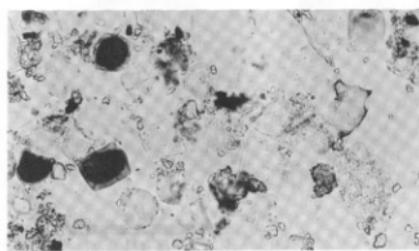
2. 6層下



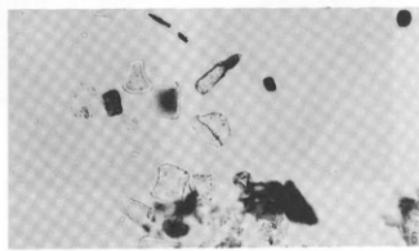
3. 8層



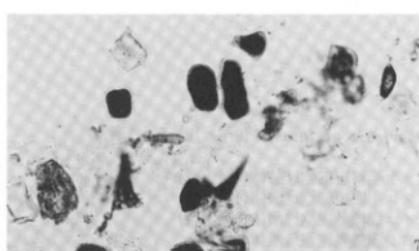
4. 9層



5. 10層



6. 11層



7. 13層

50 μm

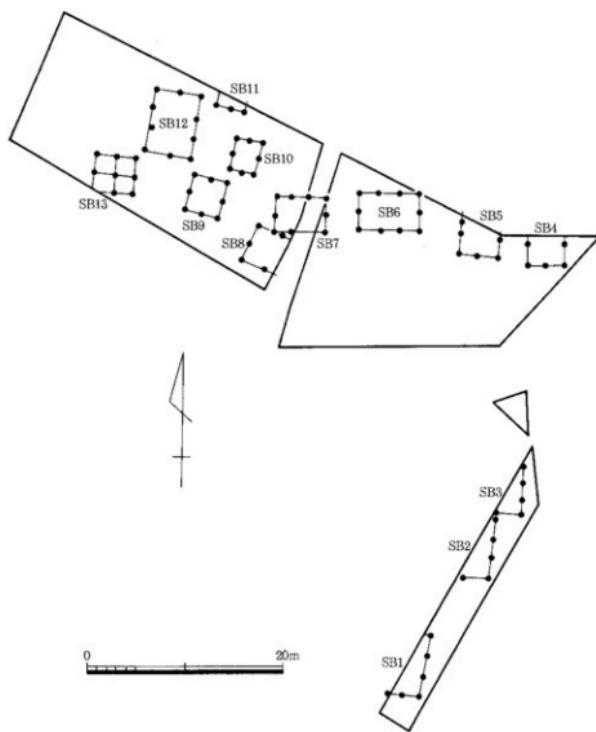
第73図 花粉化石のプレパラートの状況

第4章 まとめ

調査の結果、以下のような成果があった。

本次調査区は、府協会が調査し石器製作の中心と考えられたF地区^(E1)の北東0.2kmに近接する。このことから、当初相当量の石器が出土することが予想された。しかし調査の結果は、石器の出土量は極少量で分布も希薄であった。このため府協会調査のF地区の石器の分布は限られたものであることがわかった。

次に第1調査区から第3調査区において掘立柱建物が多数検出されたことが挙げられる。建物は石川左岸の中位段丘石川側の縁辺部付近に集中し、第3調査区の西側付近から西方にかけては湿地が広がり建物は分布していないことがわかった。



第74図 建物配置模式図

建物は本次調査で検出した以外にも1989年度の2次にわたる市教育委員会の調査でも検出されており、本次の分布状況と合わせた結果、その範囲は長さ約0.3km、幅約0.1kmにおよび、その広がりから集落跡と考えられる。

また本次調査で検出したこれらの建物の時期については、各建物の規模や、柱穴からの出土遺物により飛鳥時代から奈良時代と、中世の建物に分類できる。飛鳥時代から奈良時代の建物には、SB1、SB6、SB7、SB8、SB9、SB10、SB11、SB13の8棟、中世の建物にはこれら以外のSB2、SB3、SB4、SB5、SB12の5棟と考えられる。特にこれらの建物の内、飛鳥時代から奈良時代の建物については、本市において比較し得る良好な資料がない。したがって、やや遠隔地ではあるが当時高向遺跡と同様、河内国の南河内地域に位置する藤井寺市の北岡遺跡で検出されている8世紀代の「官衙風建物群」と呼ばれる掘立柱建物との比較を試みた。

その結果、高向遺跡では柱穴の掘方の平面形が明瞭な方形を呈さない、規模が小さい、柱間も短いことがわかった^(註1)。このことから本次で検出した建物は、北岡遺跡の「官衙風建物群」とは相違することがわかった。

また文献上、遺跡の所在する高向という地名は、731年（天平3）に初めて著されたと言われる『住吉大社神代記』や、883年（元慶7）の『觀心寺勘錄縁起資材帳』などの古記録に見られる。またこの高向の地は、先学によって古代氏族の高向氏の本拠地の一つとして考えられているところである。これらのことから既往調査や本次調査で検出した遺構は高向氏と関連する遺構である可能性が高い。

さらに1143年（康治2）の大小の国役の免除を命じた太政官牒が出された莊園の中に「高向庄」の名が見られ、その後も戦国時代まで「高向庄」の名が残ることから鎌倉時代の建物群は「高向庄」に関係するものと考えられる。

今後、本次調査地に建設される府道が開通すると国道170号線に接続し、高向遺跡は現在多くのを占める水田から市街地へ開発が進んでいくことは確実である。高向遺跡内における調査例の増加によって、各時代における石川の段丘上の開発状況が明らかになることが望まれる。

(註1) 財団法人大阪府埋蔵文化財協会 1989年3月 『高向遺跡』

(註2) 藤井寺市教育委員会の上田睦氏に藤井寺市北岡遺跡の調査で検出した8世紀代の掘立柱建物と比較し検討していただいた。

図版



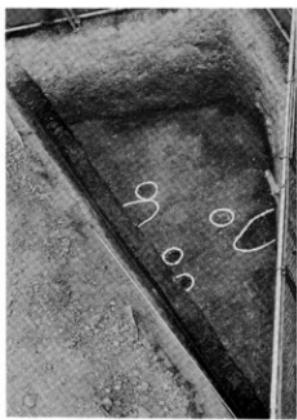
現地説明会風景



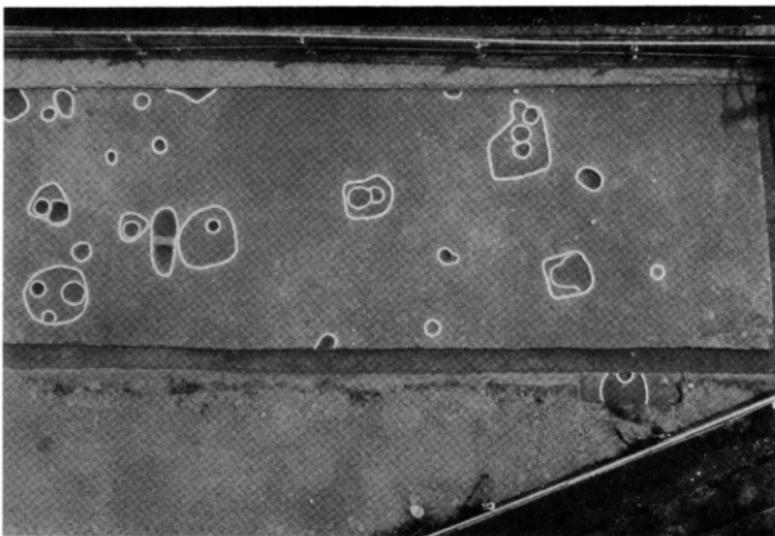
調査区全景（真上から）



調査区全景（北から）



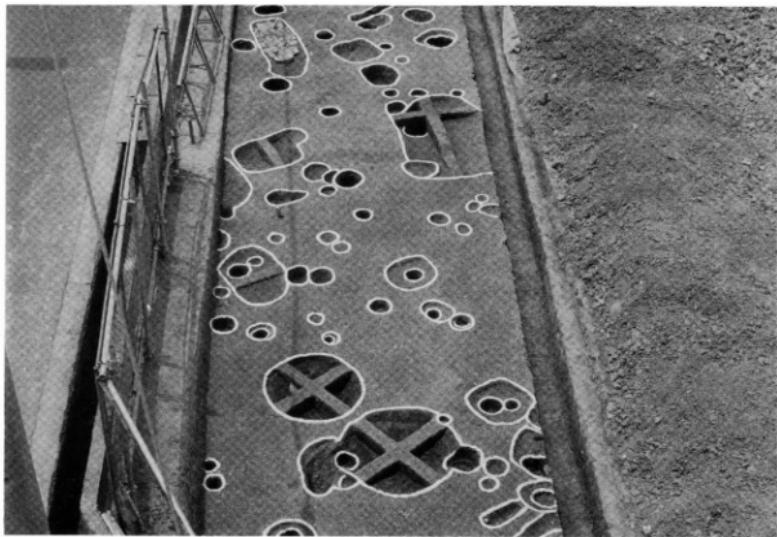
◀ 調査区全景（南から）



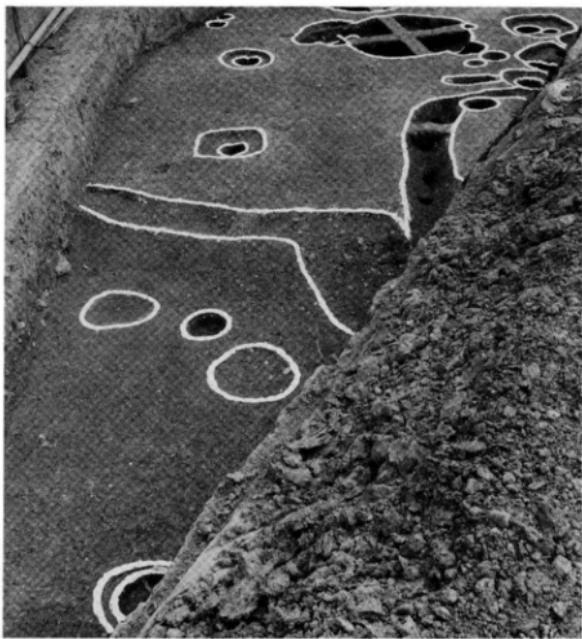
S B 1 (真上から)



S B 1 (南から)



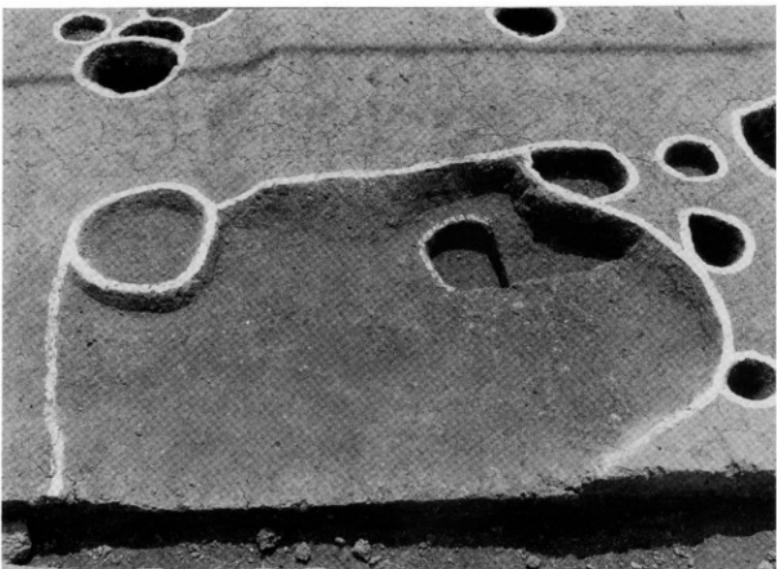
S B 2 (北から)



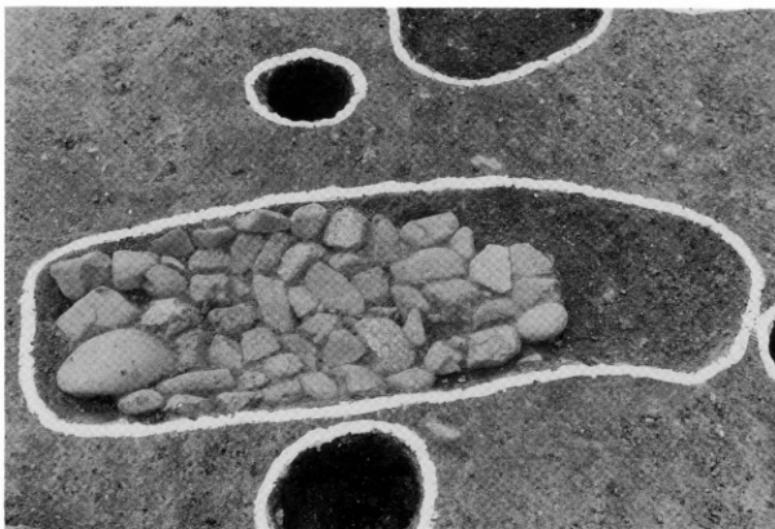
S B 3・S D 1 (北から)



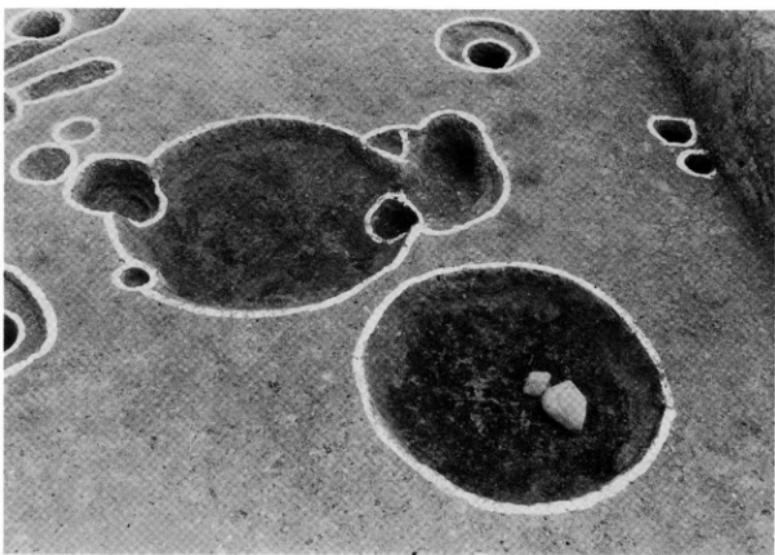
S K 4 (北から)



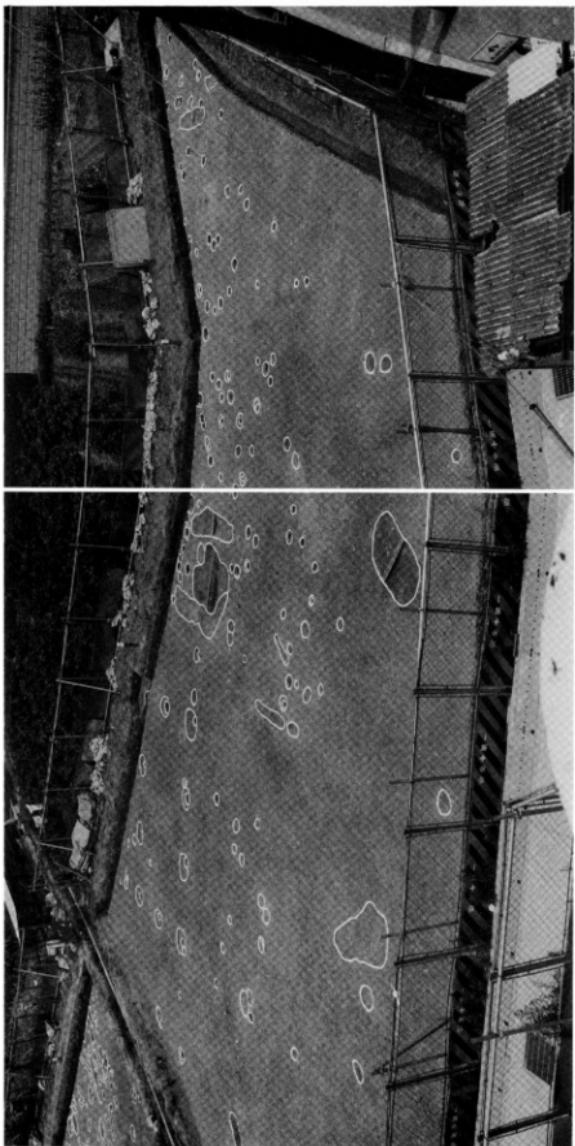
S K 11 (西から)



S S 1 (東から)



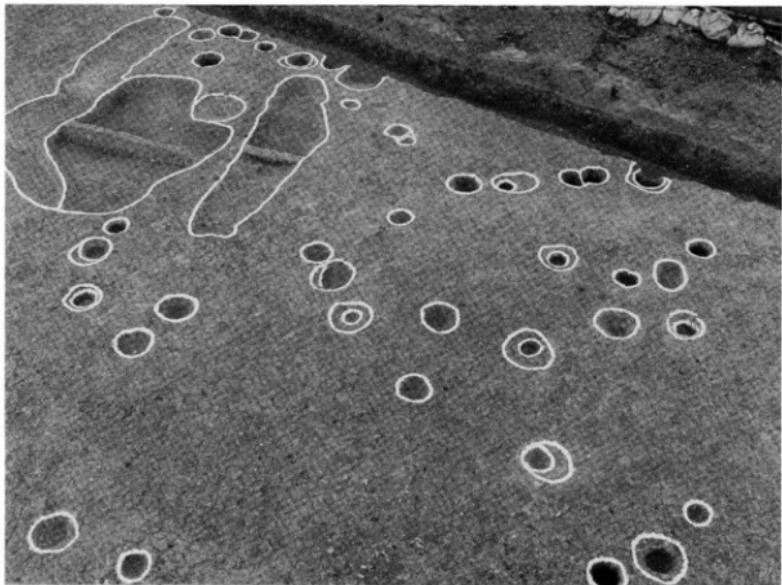
S Y 1・2 (南から)



調査区全景（南から）



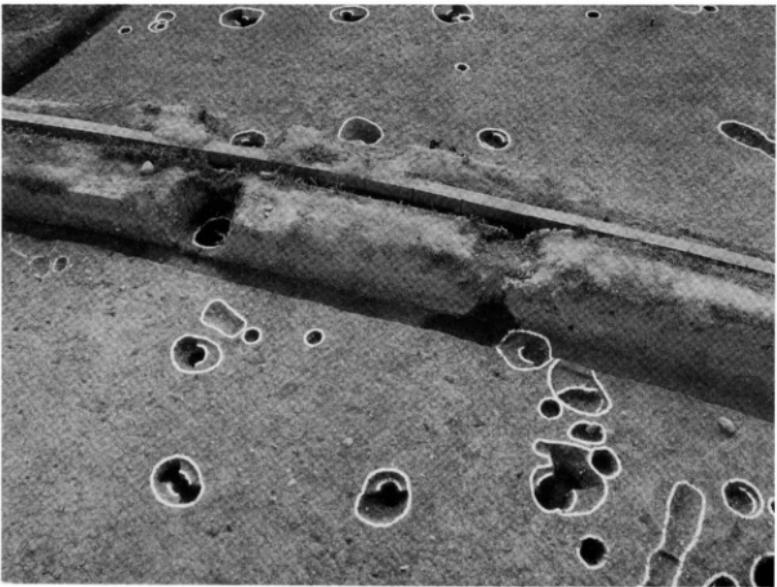
S B 4 (南から)



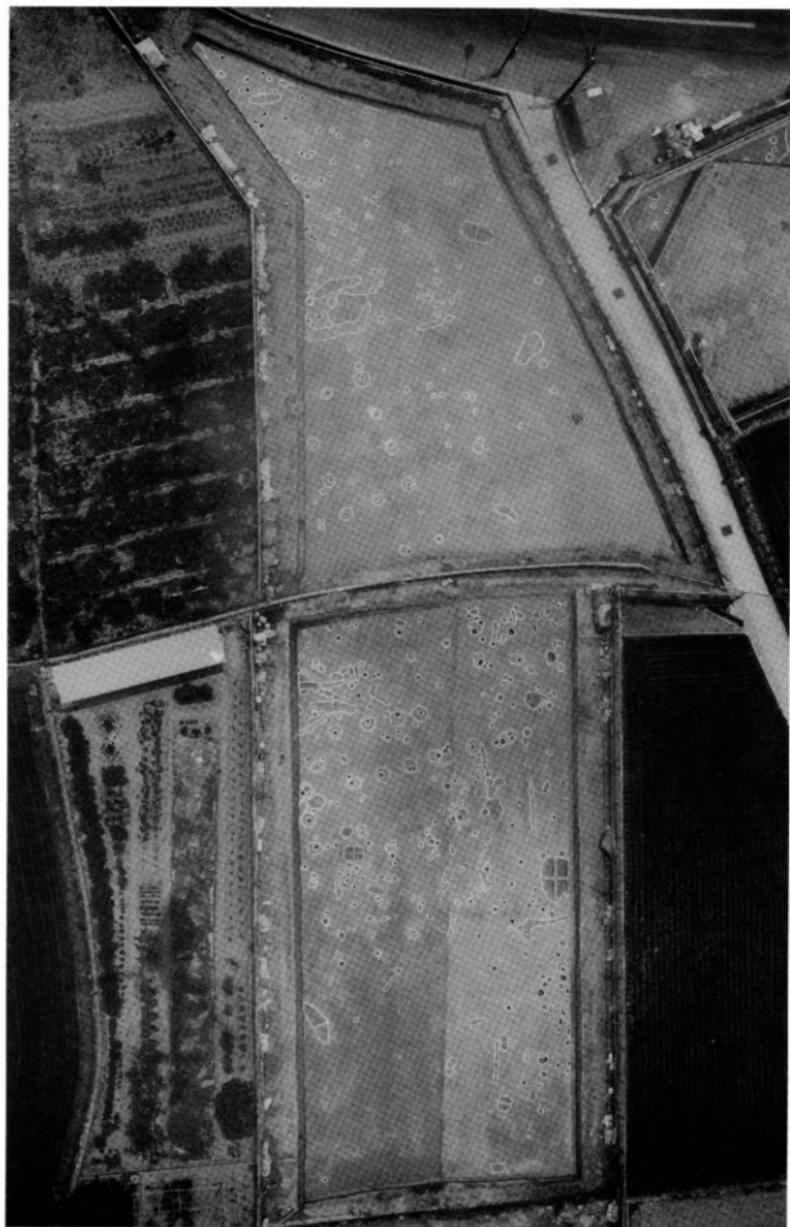
S B 5 (南から)



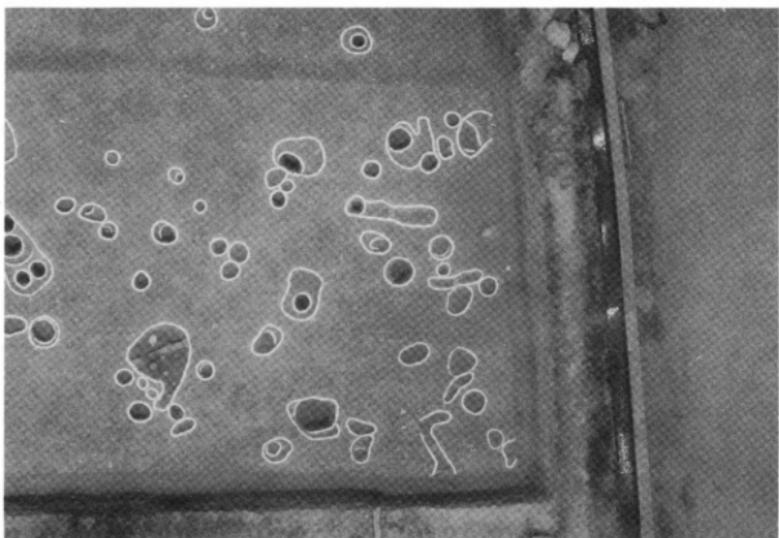
S B 6 (南から)



S B 7 (西から)



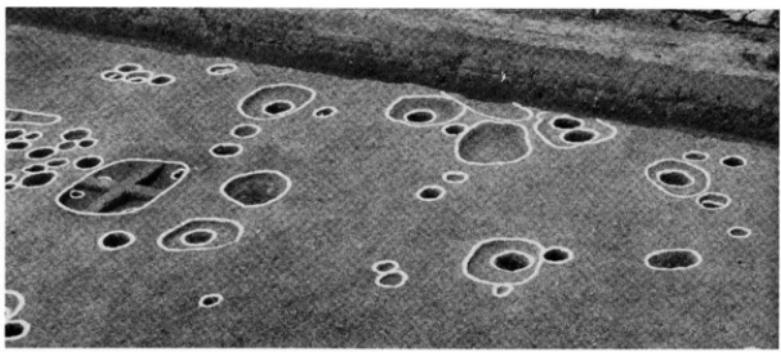
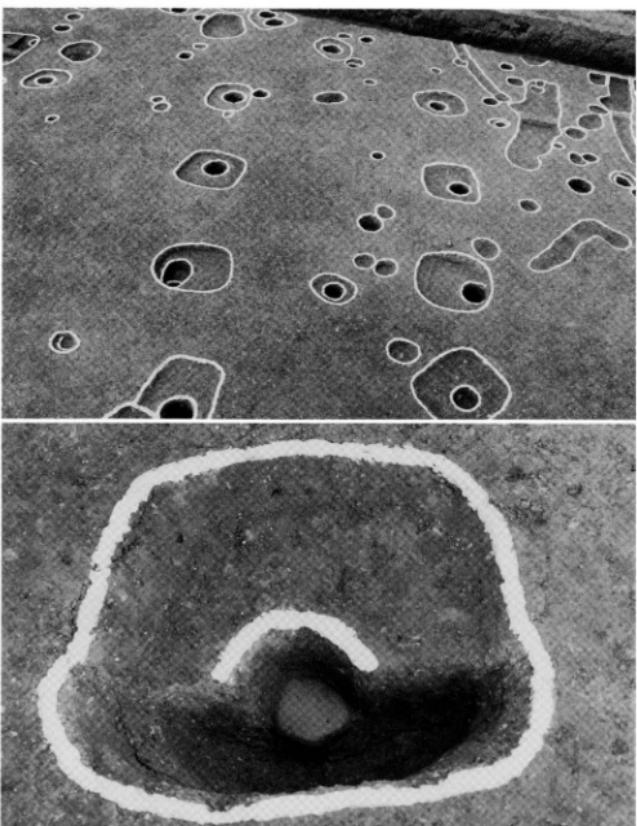
調査区全景（真上から）



S B 8 (真上から)



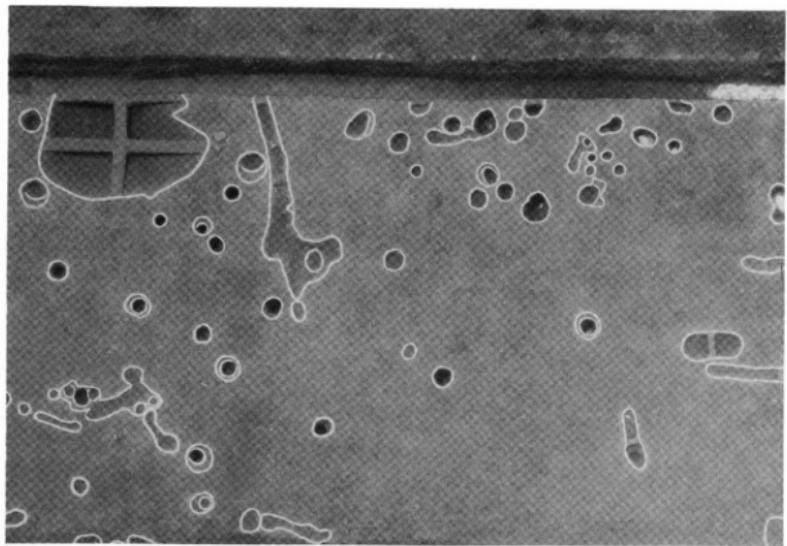
S B 9 (東から)



SB11 (南から)



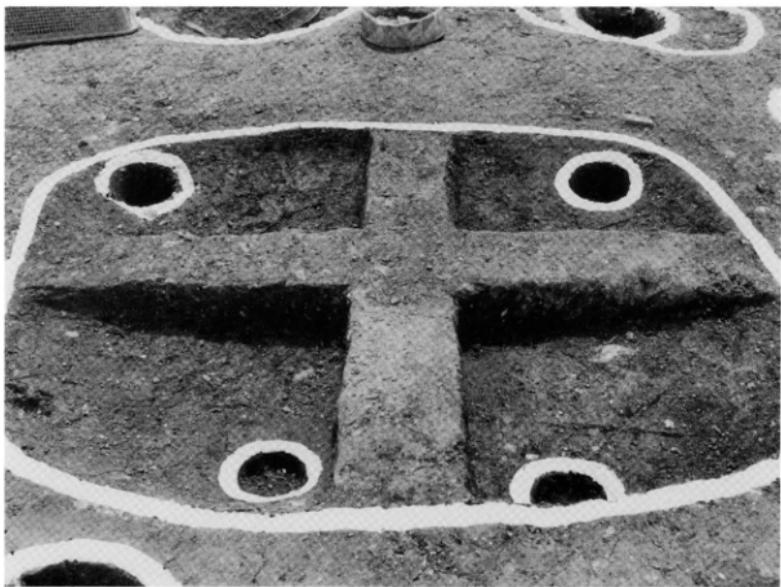
S B12 (東から)



S B13 (真上から)



S K17 (北から)



S K23 (西から)



▲ S K24 (東から)



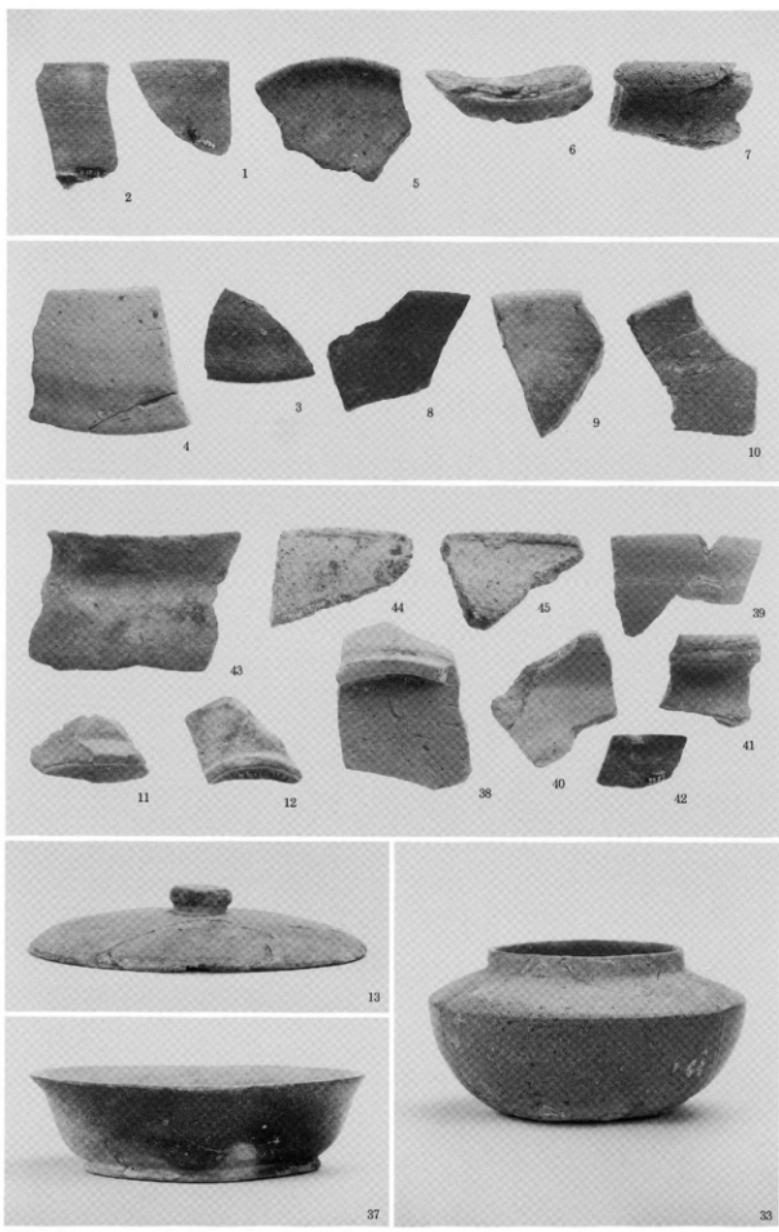
調査区全景 (西から)



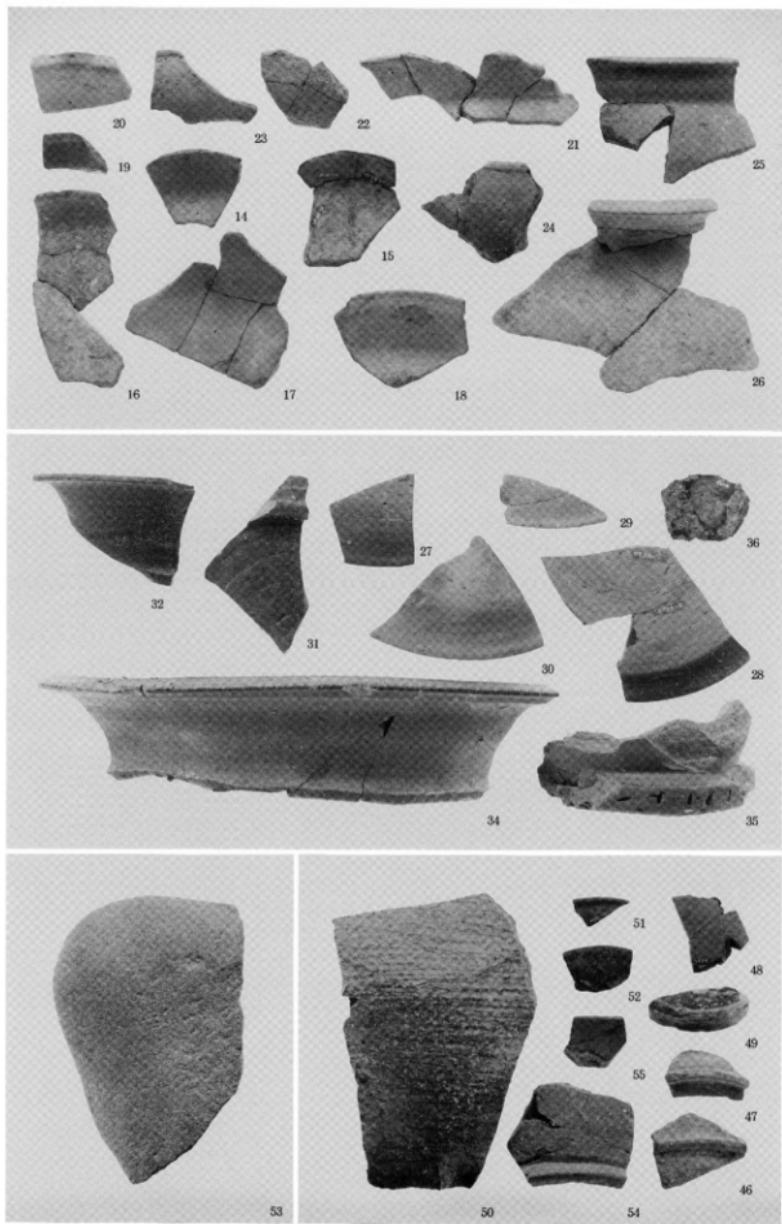
調査区全景（東から）



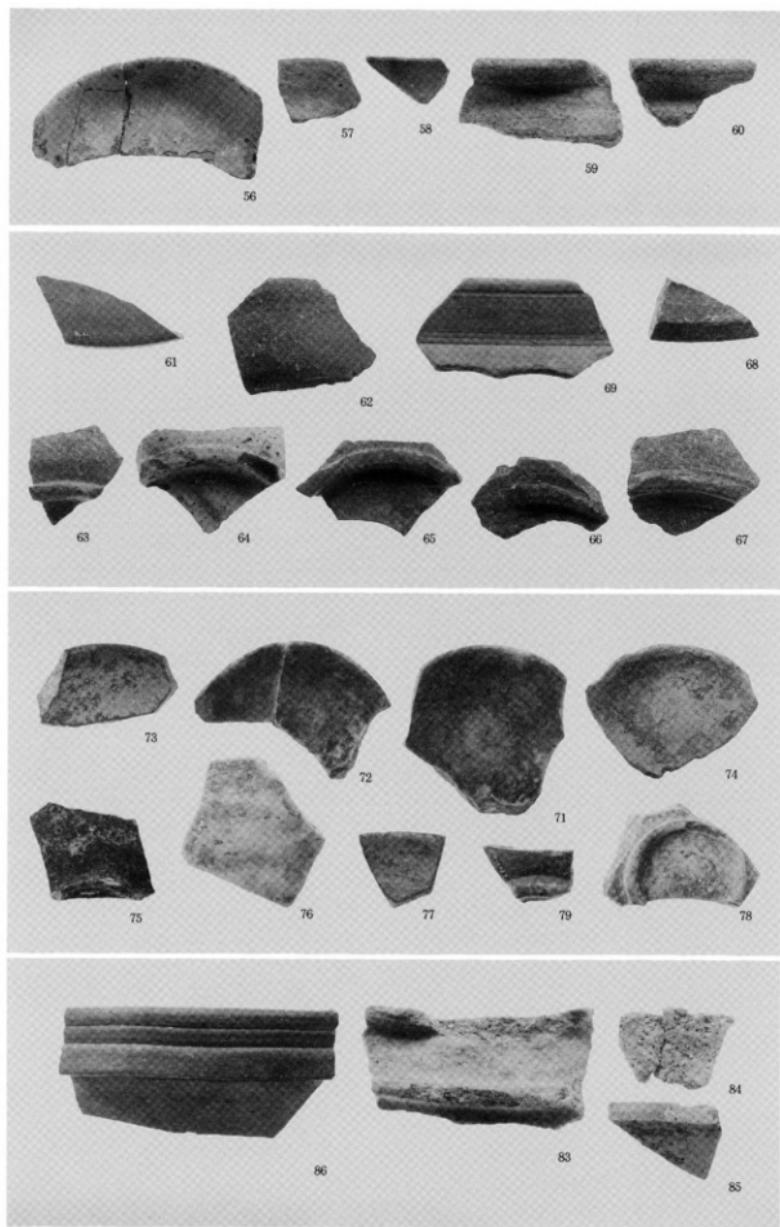
SS 2（東から）



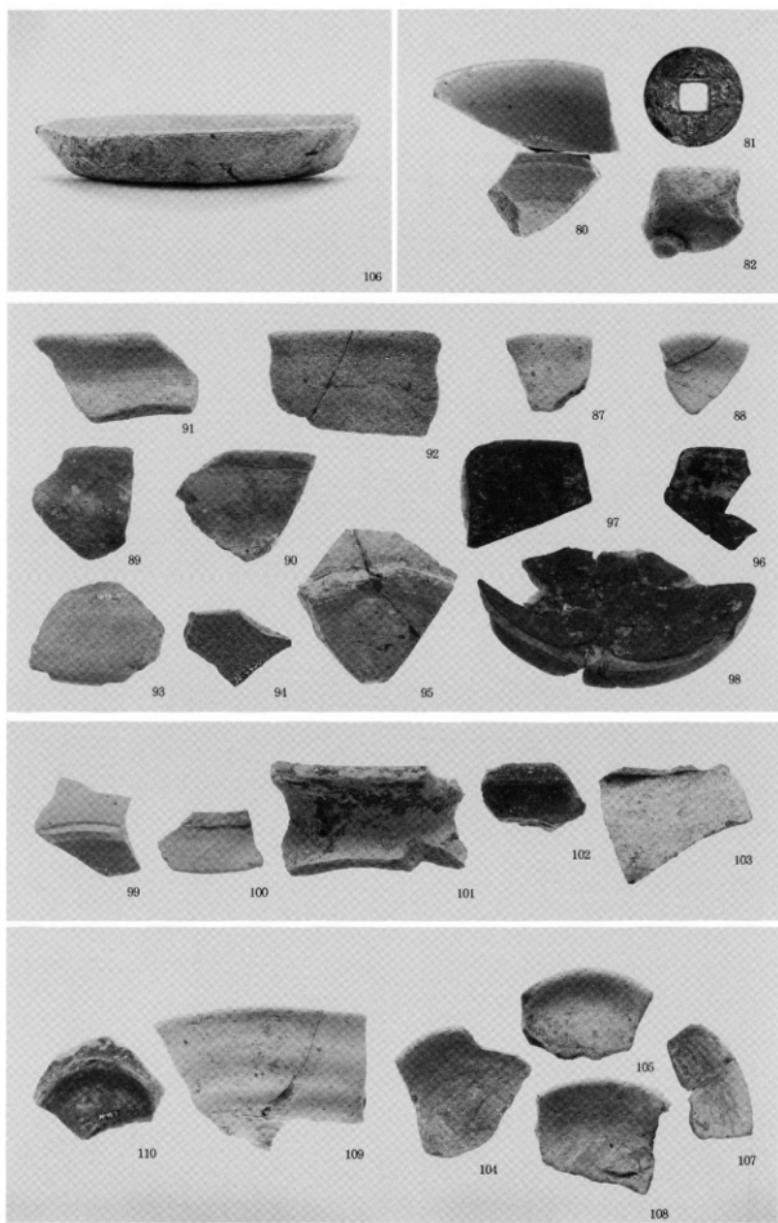
S B 2 (1・2・5～7)、S B 3 (3・4・8～10)、S D 1 (11)、S K 1 (12)、S K 4 (13・33)、S K 5 (37)、
S K 8 (38)、S K 9 (39・40)、S K11 (41・43・44)、S K12 (45)、S K13 (42)



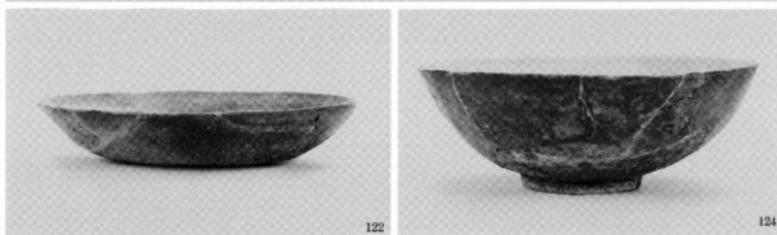
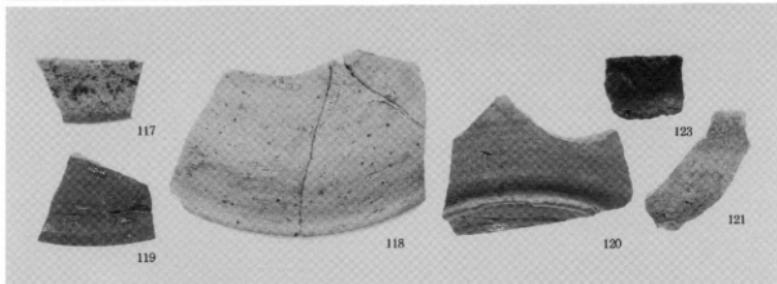
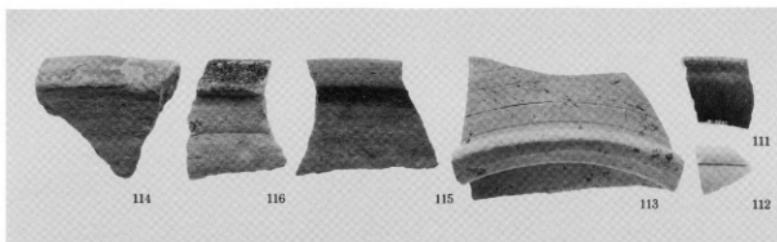
S K 4 (14~32・34~36)、S P 1 (47)、S P 2 (46)、S P 9 (48)、S P13 (49)、S S 1 (50)、S Y 1 (51~53)、
S Y 2 (54・55)



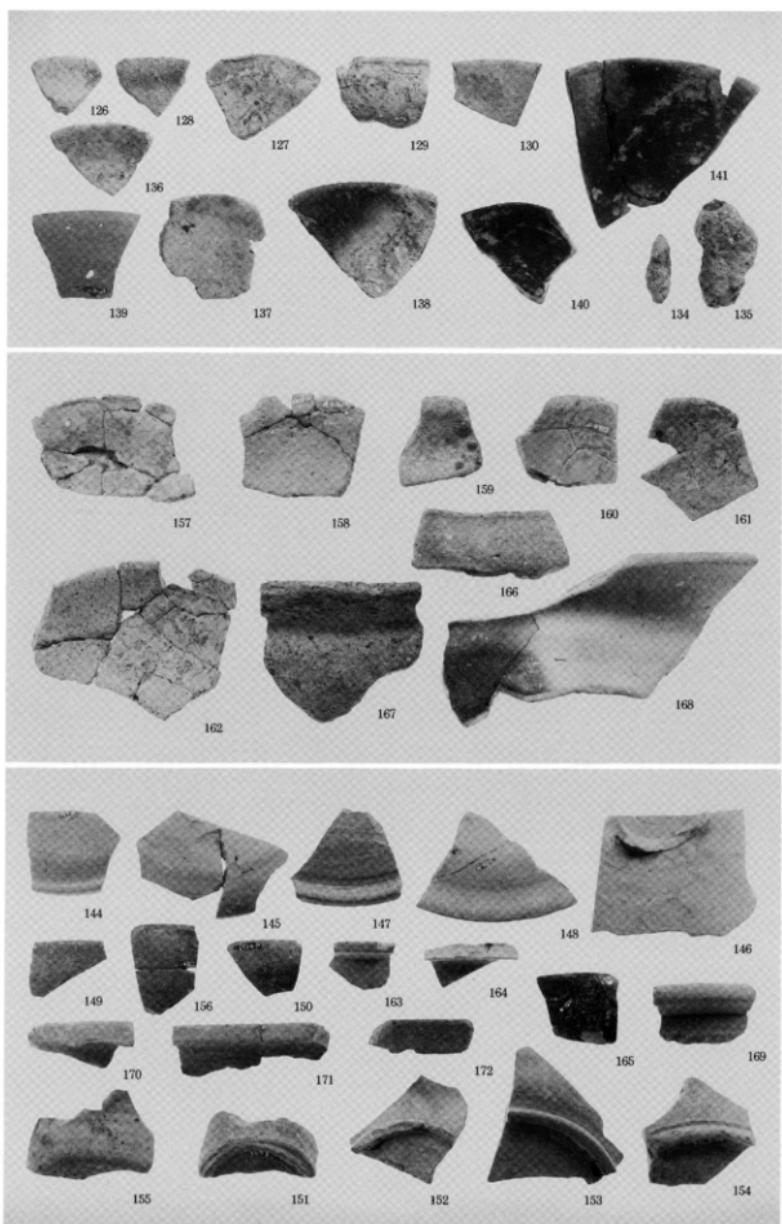
第1調査区包含層 (56~69・71~79・83~86)



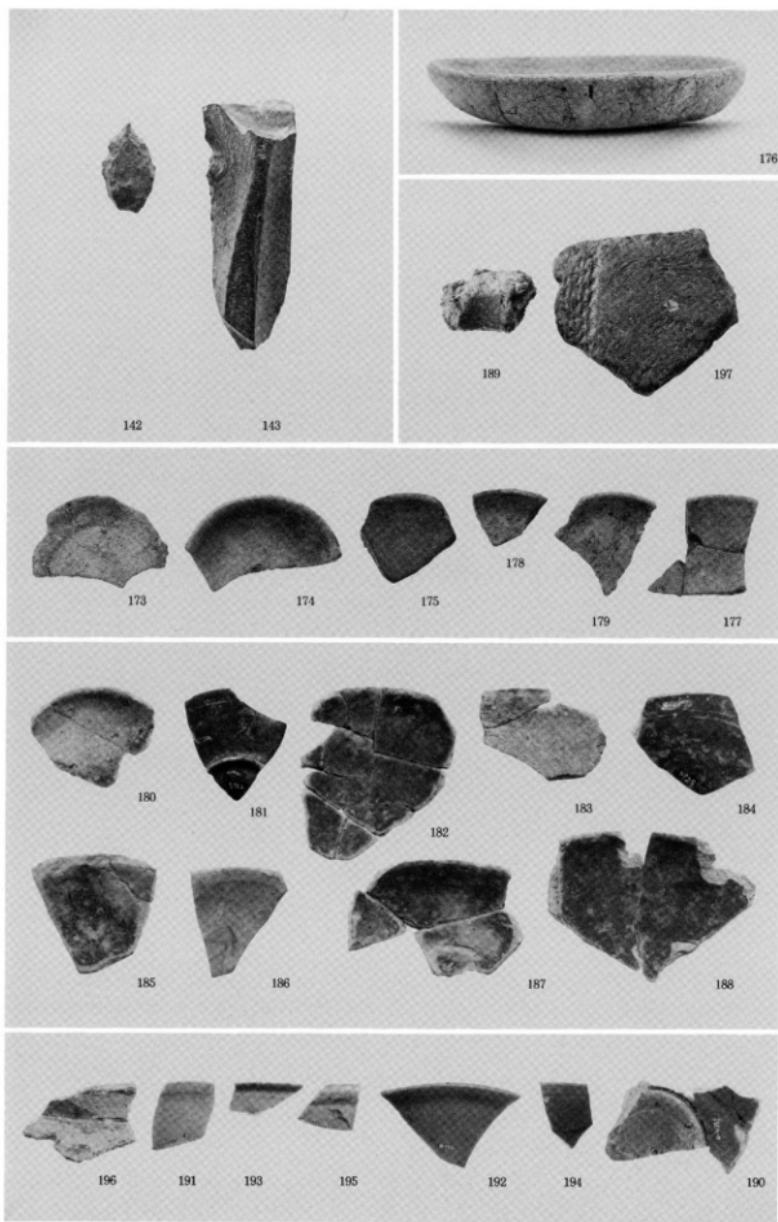
第1調査区包含層 (80~82)、S B 5 (87)、S D 2 (88)、S K15 (89・90)、S P29 (97)、S P30 (98)、S P31 (92)、
S P37 (94)、S P39 (93)、S P40 (91・95)、S P41 (96)、第2調査区包含層 (99~105・107~110)



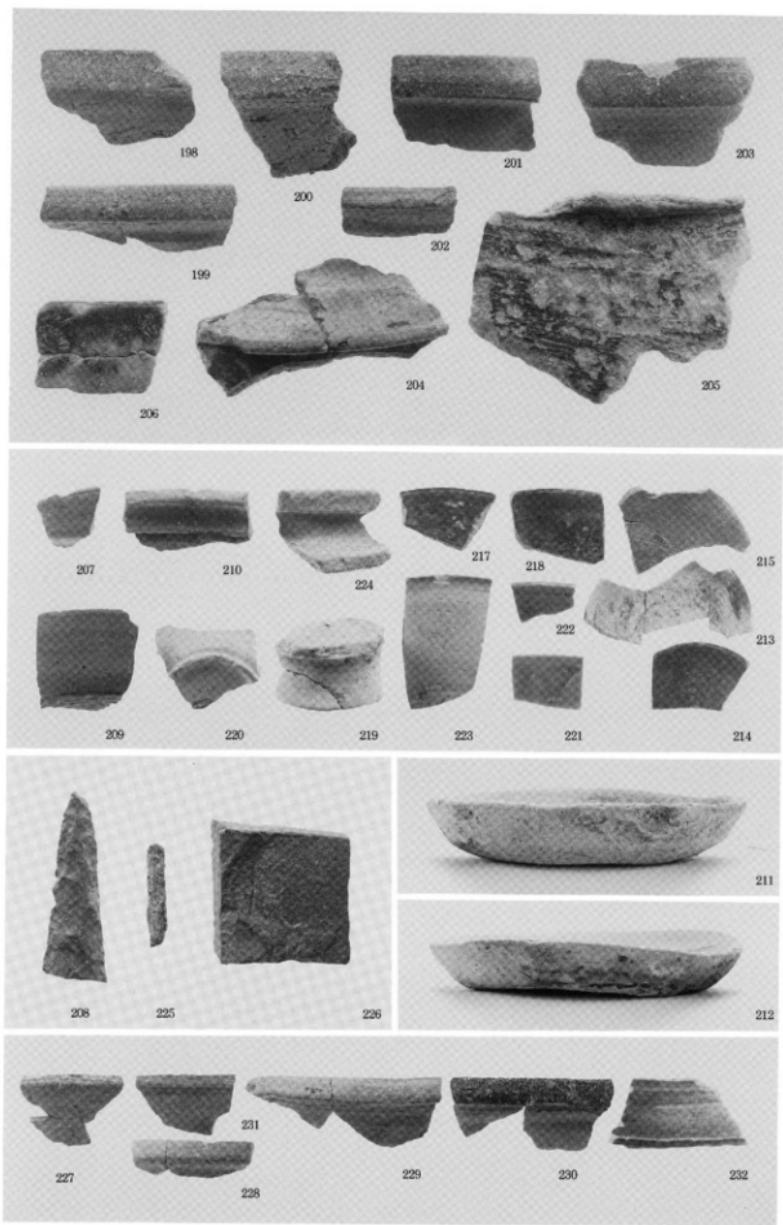
第2調査区包含層 (111~116)、S B 9 (117・121・123)、S B 10 (120)、S B 11 (119)、S B 12 (118)、S B 13 (122)、S D 4 (124)、S K 17 (131・132)、S K 24 (133)



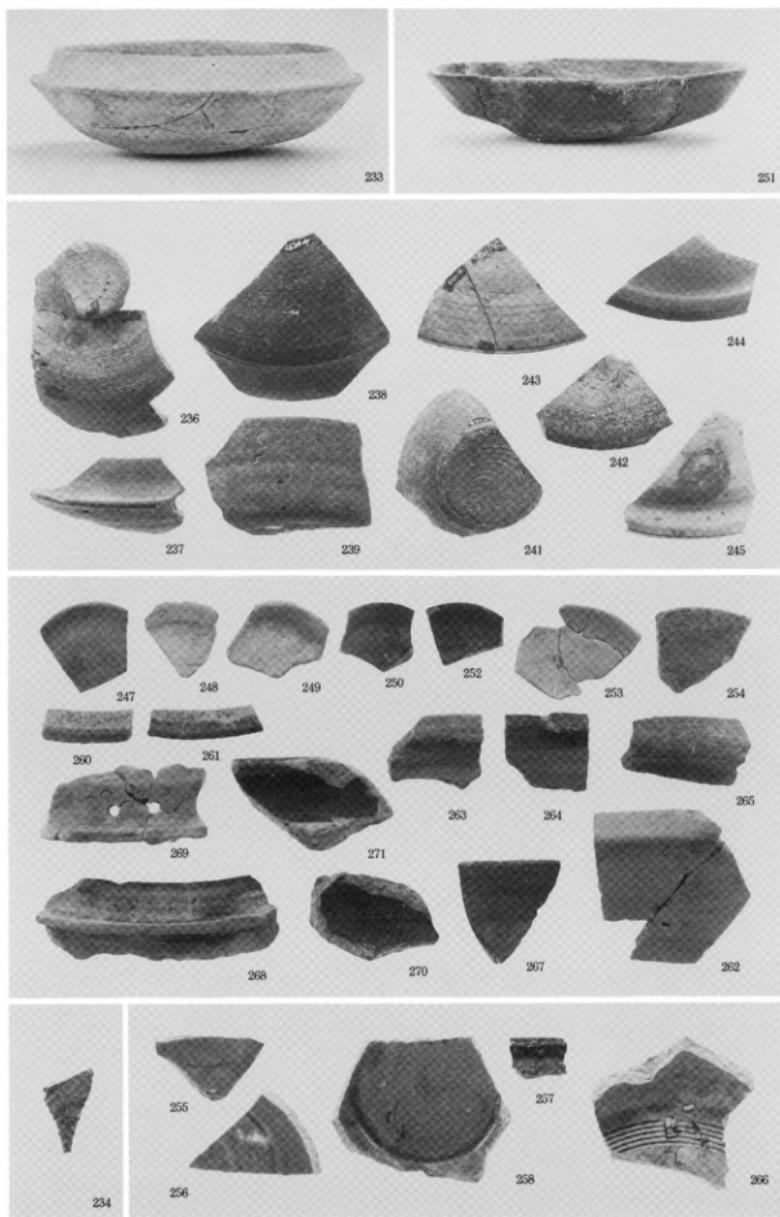
S K16 (126)、S K17 (127・128)、S K19 (129・130)、S K29 (134)、S P50 (135)、S P56 (139)、S P58 (136)、S P64 (137・140・141)、S P65 (138)、第3調査区包含層 (144~172)



第3調査区包含層 (142・143・173~197)



第3調査区包含層(198~206)、S P81(207)、第4調査区包含層(208~215・217~232)



S S 2 (233)、第5調査区包含層 (234・236~239・241~245・247~258・260~271)

報告書抄録

ふりがな	たこういせき
書名	高向遺跡
副書名	河内長野市遺跡調査会報 XII
シリーズ名	河内長野市遺跡調査会報
シリーズ番号	XII
編著者名	尾谷雅彦 烏羽正剛
編集機関	河内長野市遺跡調査会
所在地	〒586 大阪府河内長野市原町396-3 TEL 0721-53-1111
発行年月日	1996年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
たこういせき 高向遺跡	おおさかみかわちながの し 大阪府河内長野市 たこう 高向	27216	府23 河19	34° 26' 02"	135° 33' 06"	1994.6.23 1994.9.30	3,800m ²	府道河内長野かつらぎ線の整備事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高向遺跡	集落	古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 鎌倉時代	竪穴系小石室 2基 掘立柱建物 8棟 掘立柱建物 5棟 窯状遺構 2基 溝 4条 土坑 20基	須恵器 土師器、須恵器 土師質土器、須恵器 質土器、瓦器、瓦 質土器、青磁、白 磁、陶器、石製品	高向氏と関連のある掘立柱建物8棟を検出した。

河内長野市遺跡調査会報題
高向遺跡

1996年3月31日発行

発行 大阪府河内長野市原町396-3

河内長野市遺跡調査会

0721-53-1111

印刷 中島弘文堂印刷所





付図1 高向遺跡遺構全体図 (1/200)

